

多賀城市文化財調査報告書第89集

# 高 崎 遺 跡

— 第56次調査報告書 —

平成19年3月

多賀城市教育委員会



## 序 文

多賀城市は、古来より多くの人々が生活を営み、文化を育んだ地であり、その証として数多くの有形・無形の文化財が残されています。特に、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであり、関連する多くの文化財が所在しています。さらに、本市においては一般に「遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財が、市の総面積の約1/4を占めており、毎年発掘調査において貴重な成果を得ています。当教育委員会では、その成果を単に記録の保存だけにとどめず、広くわかりやすく公開し、様々な面で活用がはかれるよう努めていきたいと考えています。一方、開発事業に関連する発掘調査においては、常に事業との円滑な調整をはかり、遺跡保存のために事業者からご理解、ご協力が得られるよう文化財行政を進めていく所存です。

さて、本書は平成18年度に受託事業として実施した高崎遺跡第56次調査の発掘調査成果を収録しています。調査においては、奈良時代の竪穴住居跡や平安時代の掘立柱建物跡が良好な状態で発見されました。さらに、特筆されることに7世紀前半頃と考えられる古墳時代の窯跡の発見があげられます。この時期の窯跡の発見は、東北地方全体をみても数少ないもので、本市の歴史に新たな1ページが書き加えられたこととなります。

今後、成果については展示等をとおして速やかに公開してまいります。合わせて、この報告書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と関心の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成19年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾

# 例 言

1. 本書は、平成18年度の受託事業として実施した高崎遺跡第56次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、第1次調査からの通し番号である。
3. 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。  
S I：竪穴住居跡 S B：掘立柱建物跡 S D：溝跡 S K：土壇 S X：土器埋設遺構 S R：窯跡
4. 挿図中の高さは、標高値を示している。
5. 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6. 本書の作成に際しては、次の方々から指導、助言を賜った（敬称略）。  
村田晃一（宮城県教育委員会） 高橋義行（利府町教育委員会）
7. 本書の執筆は島田敬、編集は島田、廣瀬真理子が行った。また、本書作成に係る実測図、トレース、図版等の作成は島田、廣瀬、中村千恵子が行った。
8. 本調査の成果については、内容の一部がすでに発表されているが、本書がそれらに優先するものである。
9. 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

# 目 次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1	(2) 掘立柱建物跡	15
II. 調査に至る経緯と経過	2	(3) 溝 跡	21
III. 調査成果		(4) 土 壇	22
1. 層 序	4	(5) 土器埋設遺構	24
2. 発見遺構と遺物		(6) 窯 跡	26
(1) 竪穴住居跡	4	IV. まとめ	40

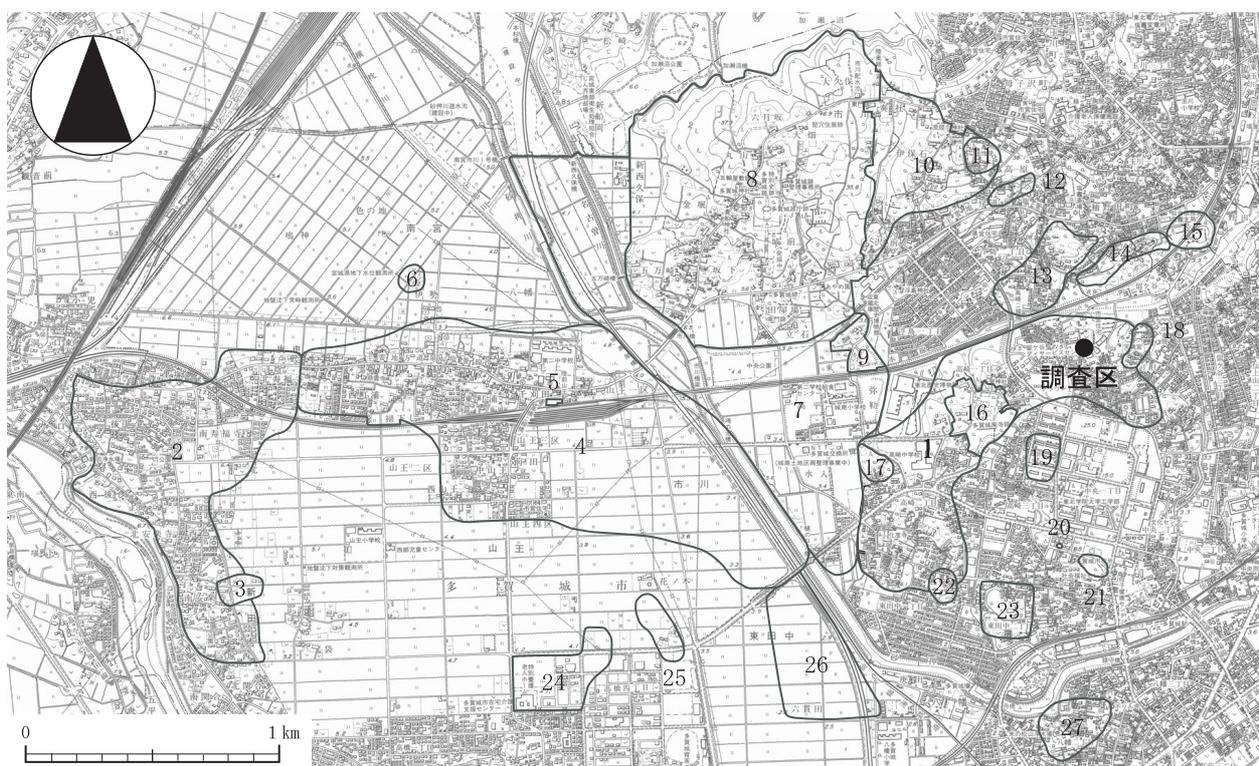
# 調査要項

1. 調 査 名 高崎遺跡第56次調査
2. 所 在 地 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目35地内
3. 調 査 面 積 1,520m<sup>2</sup>（対象面積 2,914m<sup>2</sup>）
4. 調 査 期 間 平成18年4月10日～8月11日
5. 調 査 主 体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
6. 調 査 担 当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所 長 佐藤慶輝
7. 調 査 担 当 者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 島田敬 調査員 廣瀬真理子
8. 調 査 協 力 者 鈴木芳光
9. 調 査 従 事 者 赤間かつ子 浅野喜久男 有泉宏一 井口幸男 伊丹一欽 大江かおり 大場勝喜  
小幡武 大場孝也 岡本典子 小野玉乃 小野寺恵子 菊田百合子 久保田厚生  
小松まり 清水亮 今野和子 佐藤十五 塩井一征 下山功暁 鈴木政義 鈴木芳恵  
土屋利通 南城美岐子 平山節子 藤沢拓司 藤田恵子 宮川ハルミ 柳裕順  
渡辺ゆき子
10. 整 理 従 事 者 中村千恵子、村上和恵、横山佳織、遠藤友美、松崎祥子、高木一枝

# I. 遺跡の地理的・歴史的環境

高崎遺跡は、多賀城市の東半部を占める標高30m以下の低丘陵西端部に位置する。この丘陵は、塩竈方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に派生している。このため、大小の谷が入り込み、緩やかながら起伏に富んだ地形となっている。また、遺跡の範囲は、東西約1.2km、南北約1.0kmで、北側から西側にかけて弧を描くような形を呈している。

本遺跡は、古墳時代から近世にかけての複合遺跡として知られている。特に陸奥国府が置かれた多賀城跡やその付属寺院である多賀城廃寺跡に近接することから、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数発見されている。



市内遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	高崎遺跡	集落・城館	古墳・奈良・平安・中世・近世	13	小沢原遺跡	集落・散布地	古代・中世
2	新田遺跡	集落・屋敷	縄文・古墳・奈良・平安・中世	14	野田遺跡	集落・城館	古代・中世
3	安楽寺遺跡	寺院	古代・中世	15	矢作ヶ館跡	集落・城館	古代・中世
4	山王遺跡	集落・都市・屋敷	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	16	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院	奈良・平安
5	特別史跡山王遺跡	国守館	平安	17	丸山岡古墳群	高塚古墳(円墳)	古墳
6	内館館跡	城館	中世	18	留ヶ谷遺跡	散布地・城館	古代・中世・近世
7	市川橋遺跡	集落・都市	古墳・奈良・平安	19	御屋敷遺跡	城館	中世
8	特別史跡多賀城跡	国府	奈良・平安	20	稲荷殿古墳	高塚古墳(円墳)	古墳
9	特別史跡館前遺跡	官衙・城館	古代・中世	21	桜井館跡	城館	中世
10	西沢遺跡	集落	古代・中世	22	東田中窪前遺跡	集落・城館	古代・中世
11	法性院遺跡	散布地	古代	23	志引遺跡	散布地・城館	古代・中世
12	高原遺跡	集落	古代・中世	24	大日南遺跡	散布地・屋敷	平安・中世
				25	大日北遺跡	散布地・墓地	古代・近世
				26	六貫田遺跡	散布地	古代
				27	八幡館跡	集落・城館	古代・中世

第1図 多賀城市内遺跡分布図

時代ごとにみると、古墳時代では、第17次調査（表地区）において中期の竪穴住居跡が発見されている。ここからは、石製模造品とともに原石や未製品、剥片等が出土しており、工房跡と考えられている。

奈良・平安時代の遺構は各地区で発見されている。第10次調査（坂下地区）では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数発見されており、出土遺物等から近接する多賀城廃寺跡との関連が指摘されている。また、第11次調査（井戸尻地区）では、1,000個体を超す多量の灯明皿が一括廃棄されており、周辺で「万燈会」等の仏教儀式が執り行われたことが推測されている。

中世の遺構としては、第11次調査（井戸尻地区）において、館跡に伴うと考えられる大溝跡が発見されている。また、第17次調査（表地区）では、南北約35m、東西40m以上の範囲を溝によって区画した屋敷跡が発見されている。

近世の遺構としては、第7次調査（弥勒地区）で掘立柱建物跡、溝跡、土壇、地鎮遺構からなる屋敷跡が、第26次調査（御屋敷地区）では近世墓群が発見されている。

## Ⅱ. 調査に至る経緯と経過

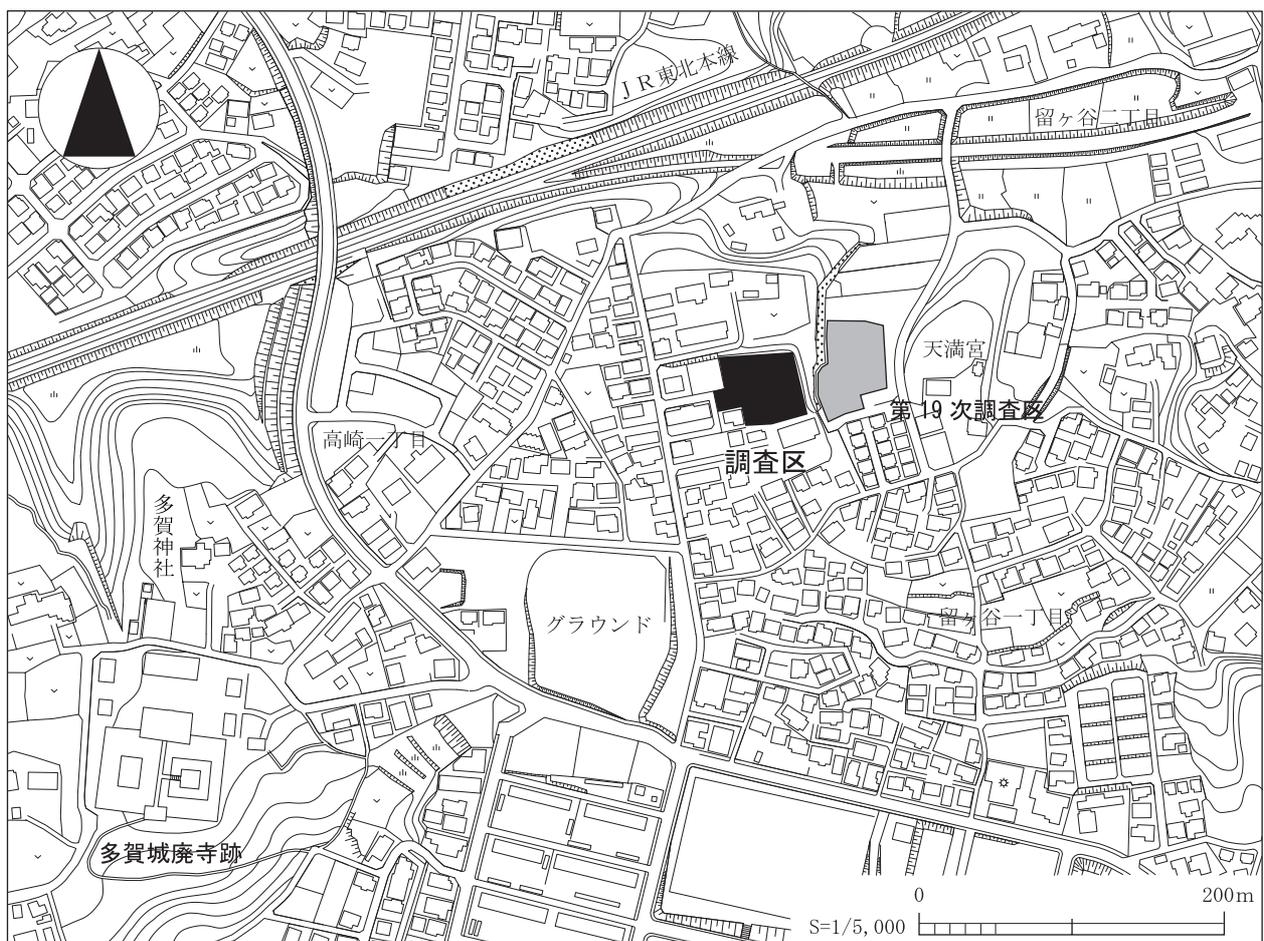
本調査は、宅地造成に伴う発掘調査である。平成17年10月に高崎遺跡の包蔵地内における開発行為の照会が地権者より提出された。当該地については、平成8年に実施した東側隣接地における発掘調査（第19次調査）で、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が発見されたことから、遺構が存在する可能性が高いことが予想された。したがって、確認調査を実施して遺構の有無の確認や分布状況を把握する必要があることを地権者に対し回答したところ、同意が得られたことから確認調査の実施に至ったものである。

確認調査（第53次調査）は、平成17年12月2日から16日にかけて実施した。調査対象地は、低丘陵の頂部平坦地から東側斜面にかけて占地する。周囲は開発が進み住宅が建ち並んでおり、対象地の北端部及び西端部も後世の削平を受けているが、そのほかは開発の手が加わらず、草木が繁茂する状態であった。調査においては、対象地内の8箇所にてトレンチを設定した。調査の結果、南半部に設定した4本のトレンチで竪穴住居跡、溝跡、土壇等が検出された。しかし、中央部から西部にかけての区域と北東部では、削平等により遺構は検出されなかった。

この結果をもとに、地権者等と宅地造成の計画案とのすり合わせを行ったところ、対象地の平坦部においては宅地造成の際の掘削の深さが遺構面まで達すること。また、斜面部においては盛土を行うが、その前段階に掘削による土地の成形を必要とすることなどを確認した。これを受けて、確認調査において後世の削平が認められた以外の区域については、全面的に本発掘調査の対象となる旨を提示したところ、調査実施の承諾が得られたことから、平成18年4月5日付けで埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、4月10日から発掘調査（第56次調査）を実施したものである。

調査は、表土を除去する際に多量の土砂が出ることが予想されたため、はじめに遺構が集中するであろう南半部（南区）で調査を実施し、北半部（北区）は排土場所にあてることにした。4月10・11日の2日間で重機による作業を行い、調査予定面積の約2/3の範囲で表土除去を終了した。4月13日から作業員による遺構検出作業と調査区内に点在する切り株の除去作業を開始した。遺構検出作業の結果、中央付近で竪穴住居跡（S I 1663）と掘立柱建物跡（S B 1666）を検出し、両者が重複することを確認した（4月19日）。さらに、この西側で2軒の竪穴住居跡（S I 1661・1662）の重複を確認し、また北側でも小規模な

竪穴住居跡（S I 1664）を検出した（5月11日）。これに先立ち、4月18日から21日にかけて実測図作成のための基準点設置を行った。本調査の基準点については、世界測地系：X=-188,535.000（日本測地系：X=-188,843.837）、世界測地系：Y=14,812.000（日本測地系：Y=15,112.115）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに東西方向は東にE01・E02…、西にW01・W02…、南北方向は北にN01・N02…、南にS01・S02…と表示した。調査は、5月15日から遺構の掘り下げを開始した。以後、平面図・断面図の作成、写真撮影等の一連の作業を順次進めていった。これと並行して、遺構検出作業も行い、6月8日までに調査区東側斜面で窯跡（S R 1678）、南西部で掘立柱建物跡2棟（S B 1667・1668）と土器埋設遺構（S X 1679）を検出した。これら各遺構の調査がほぼ終了した6月27日には、調査区全域の写真撮影を行った。7月に入り、S I 1661・1662とS R 1678を除く各遺構の調査が終了したことから、7月4・5日に重機によって北区の表土除去作業を実施した。引き続き、この区域の遺構検出作業を行い、西半部で竪穴住居跡（S I 1665）、土器埋設遺構（S X 1680）等を検出した。また、実測図作成のための基準点の設置も行い、遺構が検出されなかった東半部において地形測量を行った（7月27日）。一方、南区においてはS I 1662で建て替えがあったことを確認した後、これと重複するS I 1661の掘り下げを行い、7月25日に終了した。調査はその後、北区の各遺構と南区のS R 1678の調査を継続して実施し、8月10日におけるS R 1678の全景写真撮影と補足調査をもって遺構の調査を終了した。翌11日には発掘器材の撤収等を行い、すべての調査を完了した。



第2図 調査区位置図

# Ⅲ. 調査成果

## 1. 層 序

調査区の大部分の区域では、表土の下が直接地山になっている。他の土層は、限られた範囲での分布であり、それら同士の重複はない。

I 層：現在の表土である。平坦部では厚さ15～20cm、斜面では厚さ20～40cmである。

II 層：にぶい黄褐色土で、調査区の中央部から南西部にかけて、東西約24m、南北約26mの範囲に認められる。厚さは2～5cmと薄い。遺構と重複する箇所では、それらを覆っている。

III a 層：黒褐色土で、調査区南東部の斜面裾部に堆積する。調査区東壁付近では厚さ約30cmである。

III b 層：黒褐色土で、調査区北西部の緩やかな斜面で、地形がやや窪む箇所に堆積する。厚さは5～20cmで、同区域検出の各遺構を覆っている。

## 2. 発見遺構と遺物

本調査で発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡3条、土壇6基、土器埋設遺構2基、窯跡1基である。

### (1) 竪穴住居跡

#### S I 1661住居跡

南部中央付近の地山上で検出した住居跡である。S I 1662住居跡と重複し、これにより西側約2/3が失われている。平面形は長方形であり、規模は東西が南辺でみると3.78m、南北が東辺でみると4.25mである。なお、残存する壁の高さは床面から14～22cmを計る。方向は、北で約20度西に偏している。周溝は、南東隅付近でのみ認められる。検出できる長さは約2.3mで、幅は20～28cm、床面からの深さは約5cmである。断面形は逆台形状を呈する。床面は、地山をそのまま床としている。また、東壁沿いに溝状の浅い窪みが認められるが、幅が25～65cmと一定せず、底面にも若干の凹凸がみられることから掘り方と考えられる。住居内埋土は2層に分けられるが、灰黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含むにぶい黄褐色土が大部分を占める。遺物は、埋土から土師器の小片が数点出土しているだけである。すべて摩滅が著しく詳細は不明である。

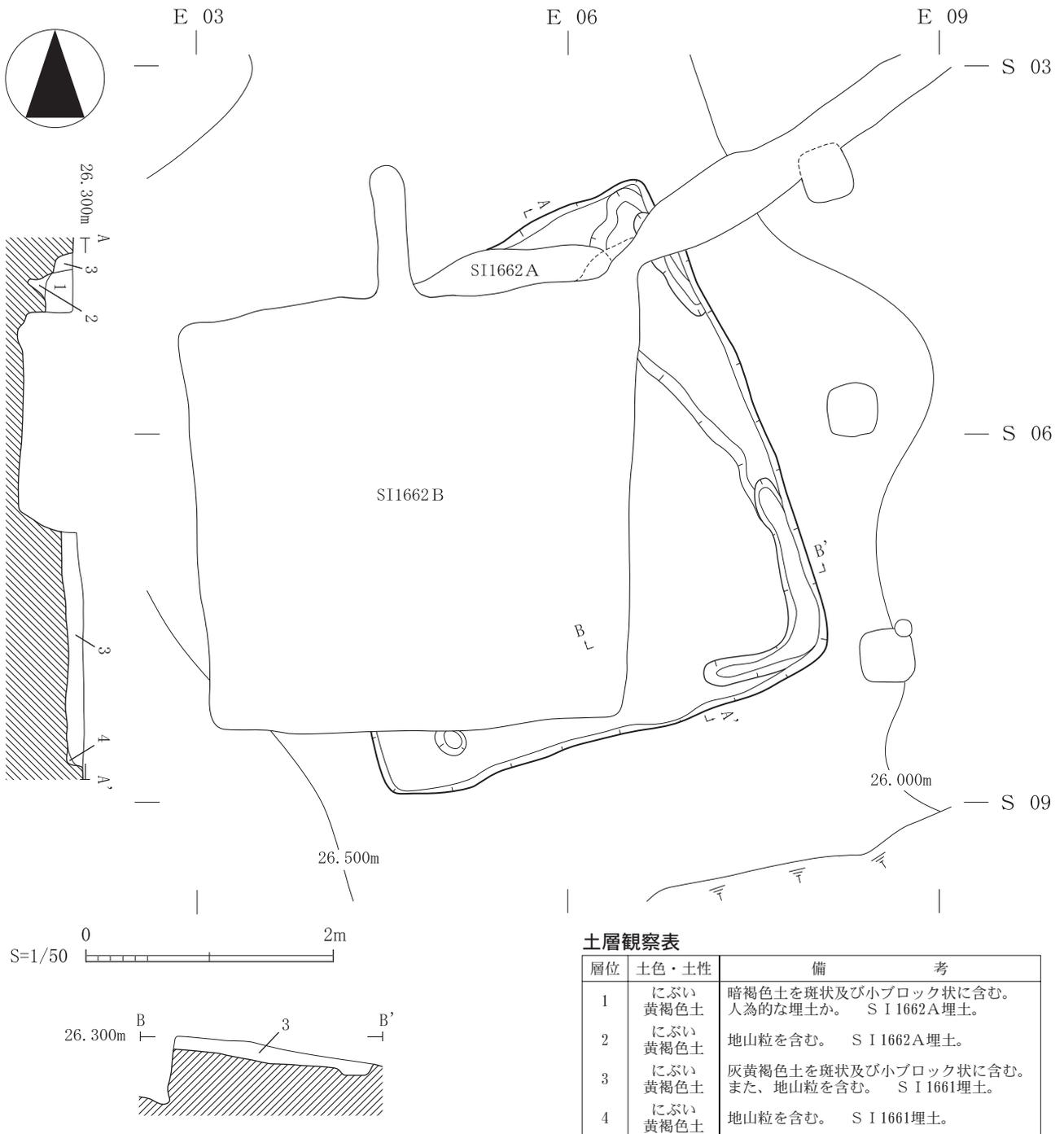
#### S I 1662住居跡

南部中央付近の地山上で検出した住居跡である。重複関係からS I 1661住居跡より新しく、S I 1663住居跡、S B 1666建物跡より古い。また、本住居内でも2時期の変遷（A→B期）が確認でき、新しい時期においては南側と西側に拡張している。

S I 1662A住居跡：後続するB期とほぼ同位置にあるため、北壁の一部と周溝を検出したのみである。周溝は、南辺と西辺及び北辺東半部のそれぞれ壁沿いに認められる。幅は14～20cm、検出面からの深さは5～10cmを計る。未検出の東辺及び北辺西半部の周溝は、平面での状況等からB期と同位置で重複すると推測される。これにより、A期の規模は東西が南辺でみると約3.0m、南北が西辺でみると約2.95mであることがわかる。また、平面でみると北辺東半部が外側に張り出す状況がみてとれる。後続するB期では北東隅に外延溝が取り付くことで、東西、南北とも幅がやや広がっていることから、A期でも同様に外延溝があった可能性が考えられる。さらに、北辺周溝の中央付近の埋土中に焼土が含まれることから、力



第3図 遺構全体図



第4図 S I 1661住居跡実測図

マドもB期と同位置にあった可能性が強い。方向は、西辺周溝でみると北で約5度西に偏している。床面は大部分が地山をそのまま床としているが、南東部の一部でにぶい黄褐色土による貼床が認められる。主柱穴は確認されなかったが、四隅の対角線上にそれぞれ円形の浅いくぼみが認められ、これが柱を据えた痕跡とも考えられる。なお、北東部にわずかに残る住居内埋土は、にぶい黄褐色土の単層で、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。

**S I 1662B住居跡**：平面形は方形であり、規模は東西が南辺でみると3.36m、南北が西辺でみると3.33mである。なお、残存する壁の高さは床面から38~48cmを計る。方向は、北で約5度西に偏している。カマ

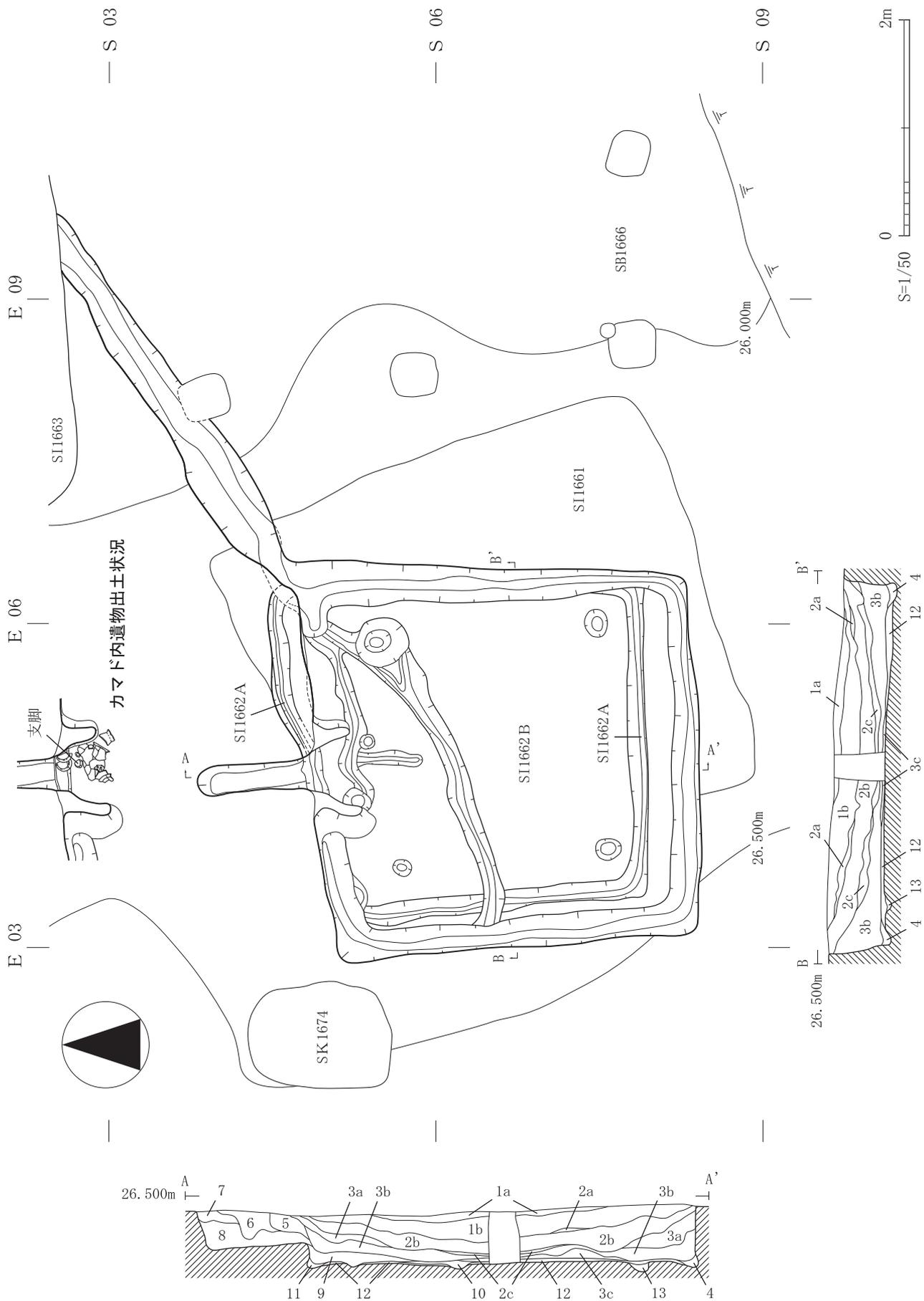
ドは、北辺の中央に付設されており、にぶい黄褐色粘土によって構築されている。両側壁の基底部での幅は最大1.10m、奥行きは約0.6mである。煙道は長さ約1.00m、幅約0.25mである。カマド内床面には、土師器の甕等の破片を敷き詰めた状況が認められ、さらに、中央付近には支脚と考えられる円柱状の粘土塊（第6図6）が据えられている。また、焚口付近から二方向に延びる溝跡が認められる。一方は、東側に延びて北東隅に取り付く外延溝に接続し、もう一方は、焚口中央付近から南側に約60cmの長さで直線的に延びるものである。床面は、明黄褐色土により2～6cmの厚さで全面的に貼床されている。周溝は、北辺東半部の一部を除く各辺の壁沿いを巡っており、住居の壁側では外側に抉り込むように造られている。幅は14～25cm、床面からの深さは6～10cmを計る。さらに、西辺中央付近において周溝から派生する溝跡を検出した。この溝跡は住居内を東西に横切るように延び、北東隅で外延溝に接続する。外延溝は、住居に取り付く箇所ではトンネル状を呈していたことが、残存状況からうかがえる。住居外では北東方向に直線的に延びるが、先端付近はS I 1663住居跡によって壊されている。確認できる長さは約4mである。なお、支柱穴は確認されなかった。住居内埋土は、大きく3層に分けられる。1層の上部には灰白色火山灰が斑状及びブロック状に含まれている。2層はにぶい黄褐色土で、黄褐色土が斑状及びブロック状に含まれるほか、下層との境には炭化物や焼土粒が含まれている。3層はにぶい黄褐色土及び黄褐色土で、黄褐色土等が斑状及びブロック状に含まれている。これらは、堆積の状況から自然堆積と考えられる。遺物についてみると、埋土1・2層では土師器は非ロクロ調整とロクロ調整のものが混在する。器種には杯、甕（第6図5）がある。このほか、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、砥石、鉄塊が出土している。埋土3層からは土師器杯・甕、須恵器瓶が出土しているが、土師器についてはすべて非ロクロ調整のものである。床面上出土のものには、非ロクロ調整の土師器杯・甕がある。このうち、カマド内では杯（第6図4）と甕（第6図1～3）が床面上に敷き詰められた状態で出土している。

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
1a	にぶい黄褐色土	灰白色火山灰を斑状及びブロック状に多く含む。	5	黄褐色土	炭化物を若干含む。 煙道部埋土。
1b	にぶい黄褐色土	炭化物を若干含む。	6	黄褐色土	炭化物を含む。 煙道部埋土。
2a	にぶい黄褐色土	焼土、炭化物を多く含む。	7	にぶい黄褐色土	焼土粒、炭化物を含む。 煙道部埋土。
2b	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。	8	にぶい黄褐色土	焼土粒、炭化物を多量に含む。 煙道部埋土。
2c	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、焼土、炭化物を含む。	9	黒 色 土	炭化物層。 焼土粒を多量に含む。 カマド埋土。
3a	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に若干含む。また、炭化物を若干含む。	10	褐灰色土	黄褐色土を斑状に含む。
3b	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。	11	にぶい黄褐色粘土	カマド下、周溝埋土。
3c	黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。	12	明黄褐色土	にぶい黄褐色土や褐灰色土を斑状及びブロック状に多く含む。また、地山礫も含む。 貼床土。
4	褐灰色土	黄褐色土を斑状に含む。 周溝埋土。	13	にぶい黄褐色土	黄褐色土や明黄褐色土を斑状に含む。 S I 1662Aの周溝埋土。

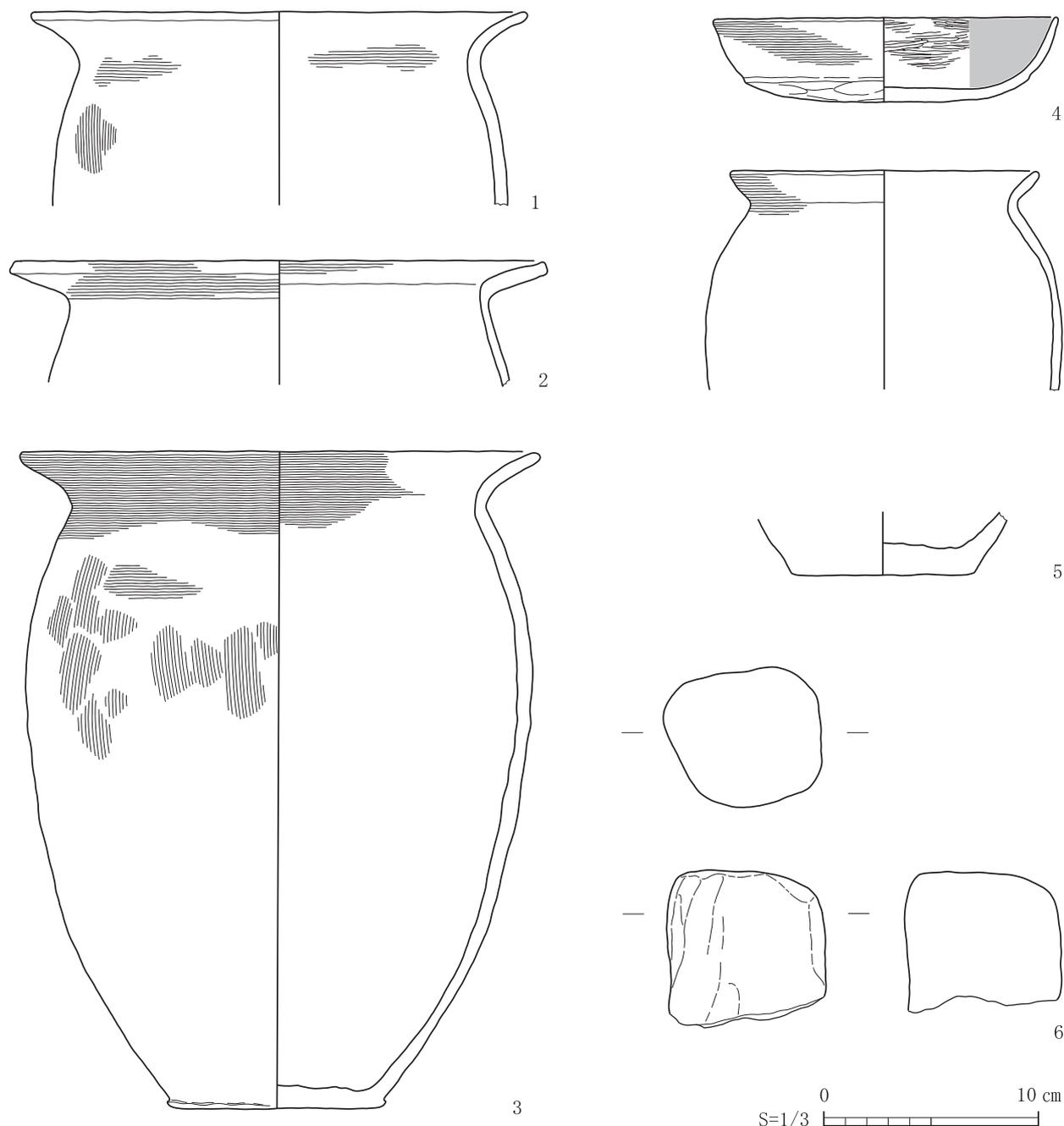
表 1 S I 1662住居跡土層観察表（第5図に対応）

### S I 1663住居跡

中央部の地山上で検出した住居跡である。重複関係からS I 1662住居跡より新しく、S B 1666建物跡より古い。平面形は方形であり、規模は東西が約4.9m、南北が約4.7mである。なお、残存する壁の高さは床面から16～45cmを計る。方向は、北で約3度西に偏している。カマドは、北辺のほぼ中央に付設されており、にぶい黄褐色粘土によって構築されている。両側壁の基底部での幅は最大1.02m、奥行きは約0.5mである。煙道は長さ1.50m、幅は0.32～0.35mであり、煙出し穴の底面が窪んでいる。カマド内には支脚



第5図 S I 1662住居跡実測図



単位：cm

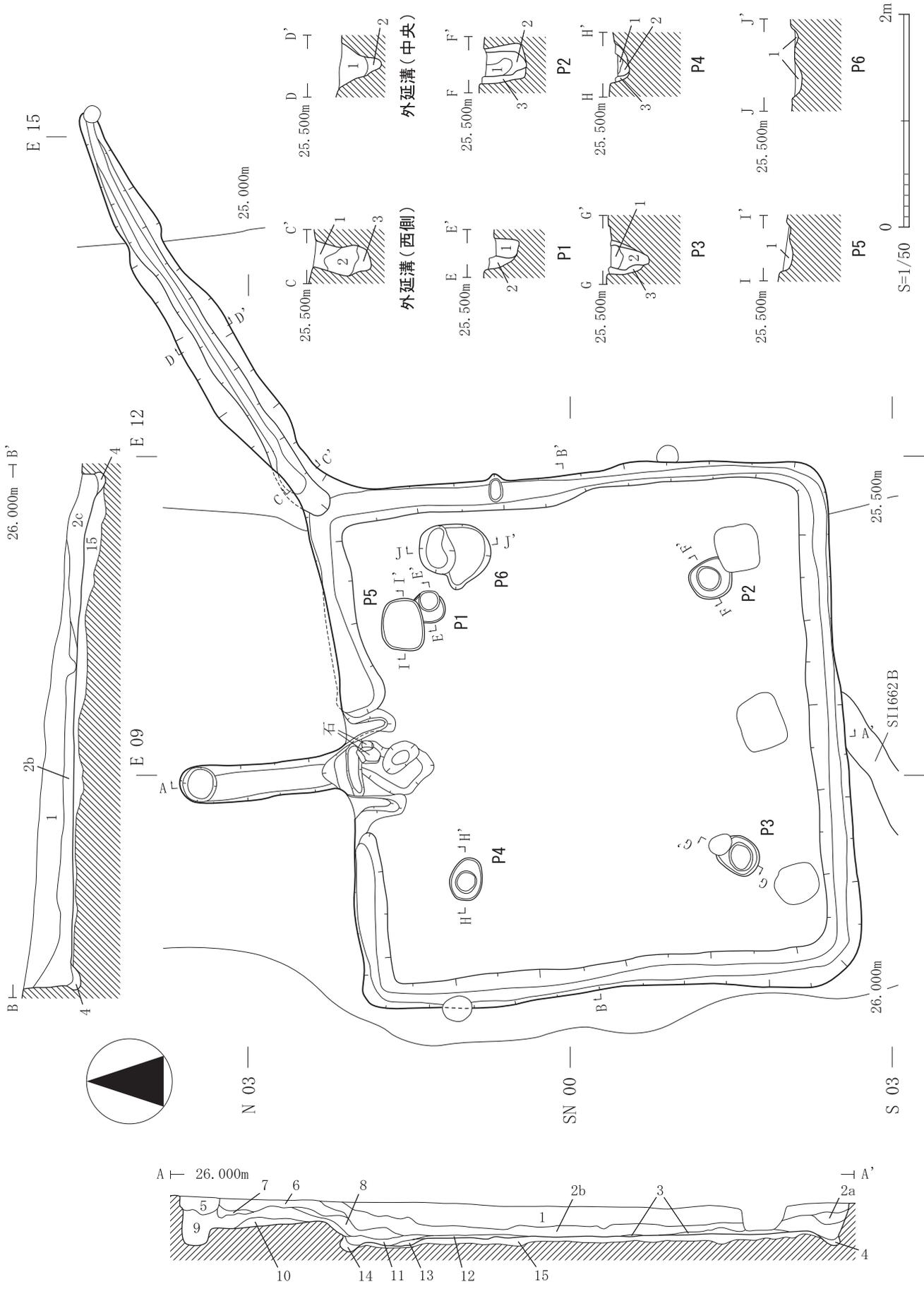
番号	種類	層位	特 徴		口 径 残存率	底 径 残存率	器 高	写 真 版 号	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	土師器・甕	カマド 床面	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ	(23.2) 1/24	—	—	8-5	R3	
2	土師器・甕	カマド 床面	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	(24.8) 5/24	—	—	8-6	R4	
3	土師器・甕	カマド 床面	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ	(24.2) 4/24	10.0 17/24	—	8-9	R2	
4	土師器・杯	カマド 床面	口縁部～体部：ヨコナデ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	16.1 20/24	—	4.0	8-3	R1	
5	土師器・甕	2 層	口縁部：ヨコナデ	不 明	14.4 10/24	8.6 24/24	—	8-7	R5	
6	支 脚	カマド 床面	高さ：7.4 長軸幅：7.3 短軸幅：6.4 土製					—	R83	

第 6 図 S I 1662 B 住居跡出土遺物

に使用されたと考えられる扁平な石が据えられており、その手前から焚口付近にかけては不整形の浅い窪みが認められる。床面は、黄褐色土ブロック等を多く含むにぶい黄褐色土により、全面的に貼床されている。厚さは2~12cmで、地形が傾斜する東側ほど厚くなっている。周溝は各辺の壁沿いを巡っており、住居の壁側では外側に挟り込むように造られている。幅は16~35cm、床面からの深さは5~18cmを計る。なお、周溝はカマドの側壁で止まっているが、住居構築の際ははじめに周溝を掘削し、その上にカマドを造ったことが確認できる。また、北東隅には外延溝が取り付け、周溝がこれに接続することを確認した。外延溝は住居に取り付く箇所ではトンネル状を呈していたことが、残存状況からうかがえる。住居外では北東方向に直線的に延び、確認できる長さは約4.3mである。床面上では支柱穴とピット2基を検出した。支柱穴は四隅の対角線上にそれぞれ配置されている。掘り方の平面形はいずれもほぼ円形で、規模は径28~40cm、深さは20~44cmを計る。すべての柱穴で柱が抜き取られた痕跡が確認できる。住居内埋土は、大きく2層に分けられる。1層の上部には灰白色火山灰が斑状及びブロック状に含まれている。2層は、黄褐色土を斑状及びブロック状に含むにぶい黄褐色土である。これらは、堆積の状況から自然堆積と考えられる。遺物についてみると、埋土1・2層では土師器は非ロクロ調整とロクロ調整のものが混在する。器種

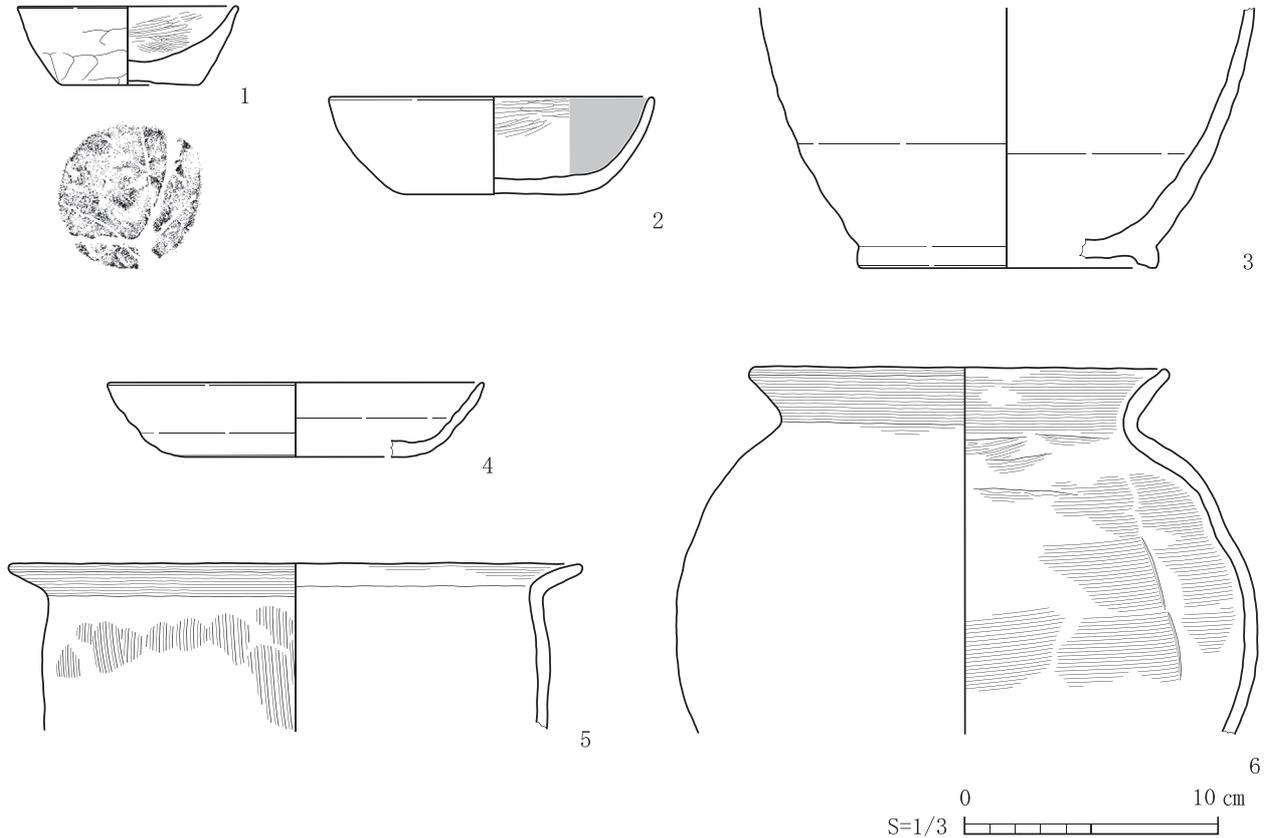
層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
住居内埋土			外延溝埋土（中央）		
1	にぶい黄褐色土	上部で灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む。	1	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に含む。
2a	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。	2	にぶい黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。
2b	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物を若干含む。	P1 埋土（北東部支柱穴）		
2c	にぶい黄褐色土	黄褐色土とにぶい黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。また、炭化物、焼土粒を多く含む。	1	灰黄褐色土	地山の小礫を含む。 柱抜取穴。
3	灰黄褐色土	黄褐色土を斑状に含む。また、炭化物を多く含む。	2	にぶい黄褐色土	地山の小礫を含む。 柱穴掘り方。
4	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に多く含む。 周溝埋土。	P2 埋土（南東部支柱穴）		
5	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。煙道部埋土。	1	灰黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。柱抜取穴。
6	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に含む。また、焼土塊を含む。煙道部埋土。	2	にぶい黄褐色土	灰黄褐色土を斑状に含む。 柱抜取穴。
7	黒褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。また、炭化物を多く含む。 煙道部埋土。	3	黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。 柱穴掘り方。
8	暗赤褐色土	焼土層。炭化物、焼土塊を多く含む。カマド埋土。	P3 埋土（南西部支柱穴）		
9	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。煙道部埋土。	1	灰黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。柱抜取穴。
10	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土塊を多く含む。 煙道部埋土。	2	にぶい黄褐色土	灰黄褐色土を斑状に含む。 柱抜取穴。
11	暗赤褐色土	焼土層。黄褐色土を斑状に含む。また、炭化物、焼土塊を多く含む。 カマド埋土。	3	にぶい黄褐色土	地山の小礫を含む。 柱穴掘り方。
12	黒色土	炭化物層。 住居中央寄り黄褐色土を斑状に若干含む。	P4 埋土（北西部支柱穴）		
13	灰黄褐色土	黄褐色土を斑状に含む。 カマド下埋土。	1	灰黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。柱抜取穴。
14	にぶい黄褐色粘土	黄褐色土を斑状に若干含む。カマド下、周溝埋土。	2	にぶい黄褐色土	灰黄褐色土を斑状に含む。 柱抜取穴。
15	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、地山の小礫を含む。 貼床土。	3	にぶい黄褐色土	地山の小礫を含む。 柱穴掘り方。
外延溝埋土（西側）			P5 埋土		
1	黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に若干含む。	1	黒褐色土	地山の小礫を含む。また、炭化物を多く含む。
2	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。	P6 埋土		
3	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。	1	黒褐色土	地山の小礫を含む。また、炭化物を多く含む。

表2 S I 1663住居跡土層観察表（第7図に対応）



第7图 S 11663住居跡実測图

には杯（第8図1・2）、甕がある。このほか、須恵器杯・瓶（第8図3）・甕、須恵系土器杯、瓦が出土している。このうち、須恵系土器は2層中にはみられない。床面上から出土したものは、土師器はすべて非ロクロ調整のもので、器種は甕（第8図6）のみが出土している。須恵器杯には、ヘラ切り後、底部を回転ヘラケズリしたものがある。また、周溝内から切り離した後、回転ヘラケズリしたもの（第8図4）、支柱穴の抜き取り穴から回転糸切り後、手持ちヘラケズリしたものが出土している。

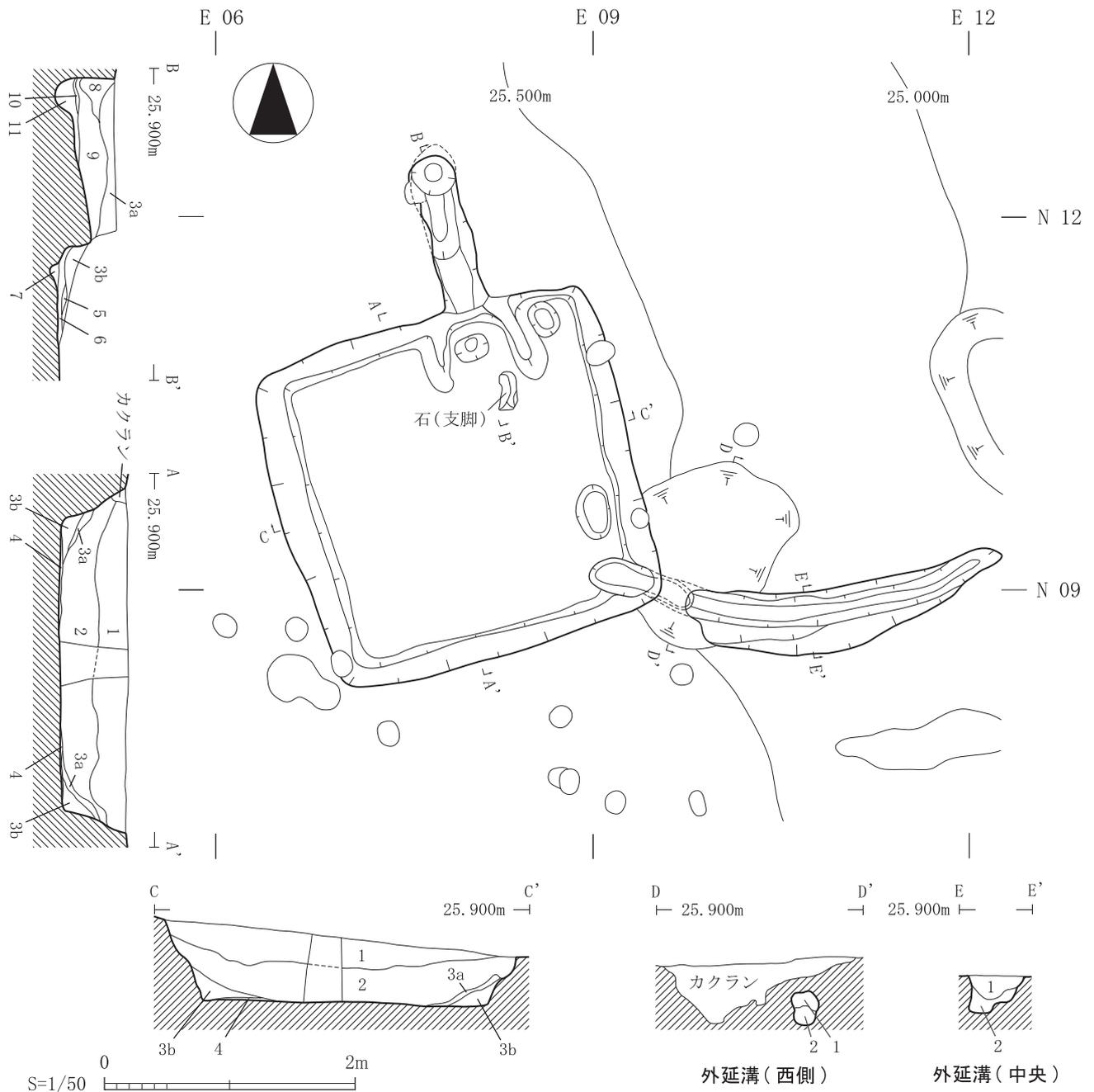


番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	2層	ロクロナデ 体部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	(8.8) 6/24	5.5 24/24	3.1	8-2	R12	底部に木葉痕
2	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：不明	ヘラミガキ・黒色処理	(12.8) 1/24	7.0 24/24	3.9	8-1	R14	
3	須恵器・瓶	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(11.8) 7/24	-	-	R15	
4	須恵器・杯	周溝	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.9) 5/24	(8.8) 3/24	3.0	-	R13	
5	土師器・甕	カマド	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ	(22.7) 5/24	-	-	-	R11	
6	土師器・甕	床面	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラナデ	16.6 18/24	-	-	8-10	R10	

第8図 S I 1663住居跡出土遺物

### S I 1664住居跡

中央部の地山上で検出した住居跡である。平面形は方形であり、規模は東西が2.84m、南北が2.78mである。なお、残存する壁の高さは床面から40～62cmを計る。方向は、北で約13度西に偏している。カマドは、北辺の東寄りに付設されており、地山粒を含む褐色粘土によって構築されている。両側壁の基底部での幅は最大0.97m、奥行きは約0.7mである。煙道は長さ1.24m、幅は0.32～0.35mであり、煙出し穴の



土層観察表

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
1	にぶい黄褐色土	上部に灰白色火山灰を斑状及びブロック状に多く含む。	9	にぶい黄褐色土	煙道部埋土。
2	黄褐色土	灰黄褐色土を多く含む。	10	暗赤褐色土	焼土層。 煙道部埋土。
3a	灰黄褐色土		11	にぶい黄褐色土	地山粒を若干含む。 煙道部埋土。
3b	褐色土		外延溝埋土(西側)		
4	褐色粘質土	床面直上土。	1	黒褐色土	
5	暗赤褐色土	焼土層。 炭化物を若干含む。 カマド埋土。	2	褐色土	黄褐色土を斑状に含む。
6	褐色土	炭化物、焼土塊を多く含む。 カマド埋土。	外延溝埋土(中央)		
7	褐色土	炭化物、焼土塊を含む。 支脚を据えた小穴。	1	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。
8	褐色土	煙道部埋土。	2	褐色土	

第9図 S I 1664住居跡実測図

底面が窪んでいる。なお、カマド内ほぼ中央には円形のくぼみが認められる。また、焚口付近の床面上から柱状の石が出土しており、一方の端部から1/3ほどに火熱を受けた痕跡が認められる。この石の火熱を受けていない範囲とくぼみの深さが一致することから、石はカマドの支脚として使用されたもの、くぼみはその据え穴と考えられる。床面は、地山をそのまま床としている。各壁は、床面から急な角度で立ち上がり、中頃で緩やかな段を有した後やや開き気味になる。周溝は確認されないが、南東隅に外延溝が取り付けられている。この箇所から約30cmにわたってはトンネル状を呈しており、その後東側に向かって弧を描くように延びる。確認できる長さは約2.8mである。また、支柱穴は確認されない。床面上においては、東壁際の北端と南端付近で非常に浅い円形及び楕円形の窪みが認められる。住居内埋土は、大きく3層に分けられる。1層の上部には灰白色火山灰が斑状及びブロック状に含まれている。2層は灰黄褐色土を多く含む黄褐色土である。3層は灰黄褐色土及び褐色土で、各辺の壁際に堆積している。これらは、堆積の状況から自然堆積と考えられる。遺物はすべて小破片であり、大部分が1層からの出土である。土師器杯・甕、須恵器杯があり、土師器については1層からロクロ調整の甕が1点出土している以外はすべて非ロクロ調整のものである。

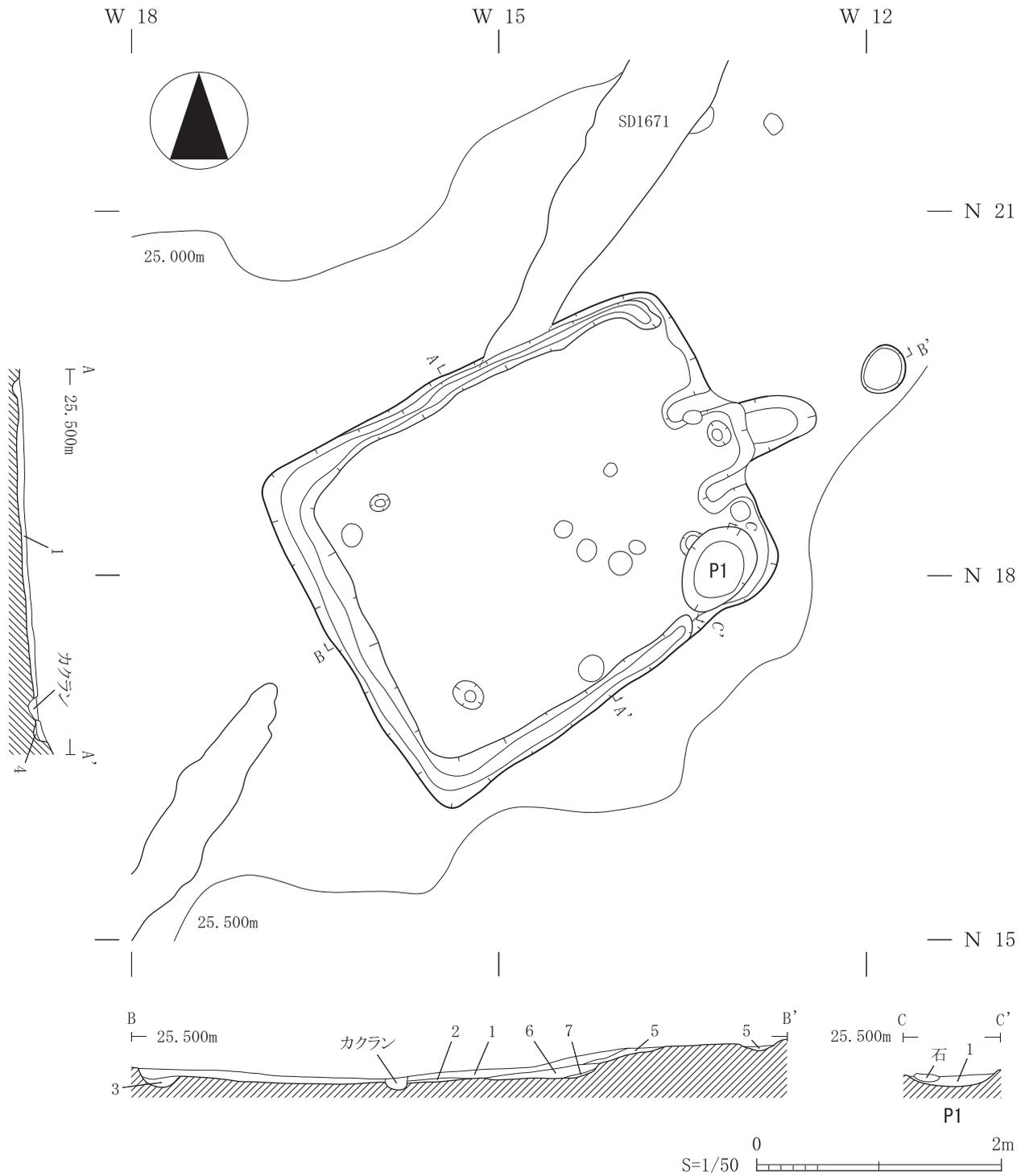
#### S I 1665住居跡

北西部の地山上で検出した住居跡である。SD 1671溝跡と重複し、これより古い。平面形は長方形である。規模は東西が3.50～3.68m、南北が2.74～3.15mで、それぞれ北辺と西辺が長い。なお、残存する壁の高さは床面から4～8cmを計る。方向は、北で約28度西に偏している。カマドは、東辺のほぼ中央にやや張り出して付設され、にぶい黄褐色粘土によって構築されている。両側壁の基底部分での幅は最大1.04m、奥行きは約0.45mである。煙道は長さ1.45m、幅は最大0.46mであるが、削平によって中央付近が失われている。床面は、地山をそのまま床としている。周溝は、カマドが付設された東辺を除く3辺の壁沿いを巡っている。幅は15～38cm、床面からの深さは2～9cmを計る。断面形はU字状を呈する。北西隅に向かって徐々に幅広くなり、底面のレベルも低くなることを確認できる。床面上では、南東隅でピット1基を検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径77cm、短径55cm、深さは12cmを計る。支柱穴は確認されない。しかし、四隅の対角線上において、北東部を除く3箇所楕円形の浅いくぼみが認められることから、これが柱を据えた痕跡とも考えられる。住居内埋土は、2層に分けられる。1層はにぶい黄褐色土で、埋土の大部分を占める。上面中央付近には灰白色火山灰の薄い層が認められる。2層は地山土を斑状に若干含む明黄褐色土で、東半部の床面上に薄く堆積している。遺物は、埋土中から土師器杯・甕（第11図2）、須恵器甕、砥石（第11図3）が出土している。床面上からは土師器杯（第11図1）が出土している。また、周溝内とP1からも土師器杯が出土しているが、いずれも小破片である。なお、土師器はすべて非ロクロ調整のものである。

## （2）掘立柱建物跡

#### S B 1666建物跡

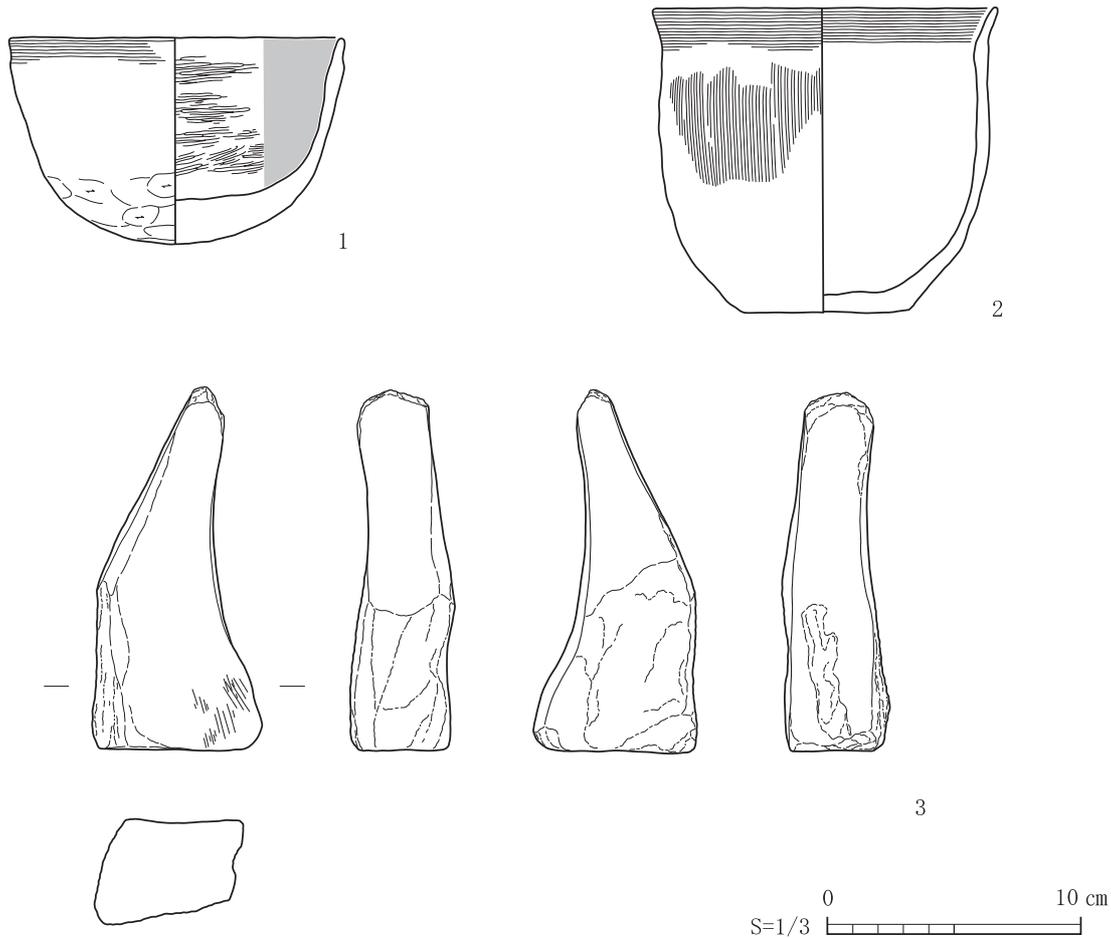
中央部南寄りの地山上で検出した南北3間、東西2間の南北棟である。S I 1662・1663住居跡と重複し、これらより新しい。方向は、東側柱列でみると北で約7度西に偏している。桁行については、東側柱列で総長約5.9m、柱間は北から約2.0m、約1.9m、約2.0m、西側柱列で総長約5.9m、柱間は北から約1.8m、約2.1m、約2.0mである。一方、梁行については北妻で総長約3.4m、柱間は西から約1.6m、約1.8m、



土層観察表

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
住居内埋土			5	褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。また、炭化物、焼土粒を含む。 煙道部埋土。
1	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土粒を若干含む。上面に灰白色火山灰の薄い層が堆積。	6	暗褐色土	炭化物、焼土塊を含む。 カマド埋土。
2	明黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に若干含む。	7	にぶい赤褐色土	焼土層。 炭化物を含む。 カマド埋土。
3	にぶい黄褐色土	明黄褐色土を斑状に含む。 周溝埋土。	P1 埋土		
4	明黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。 周溝埋土。	1	灰黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に若干含む。

第10図 S I 1665住居跡実測図



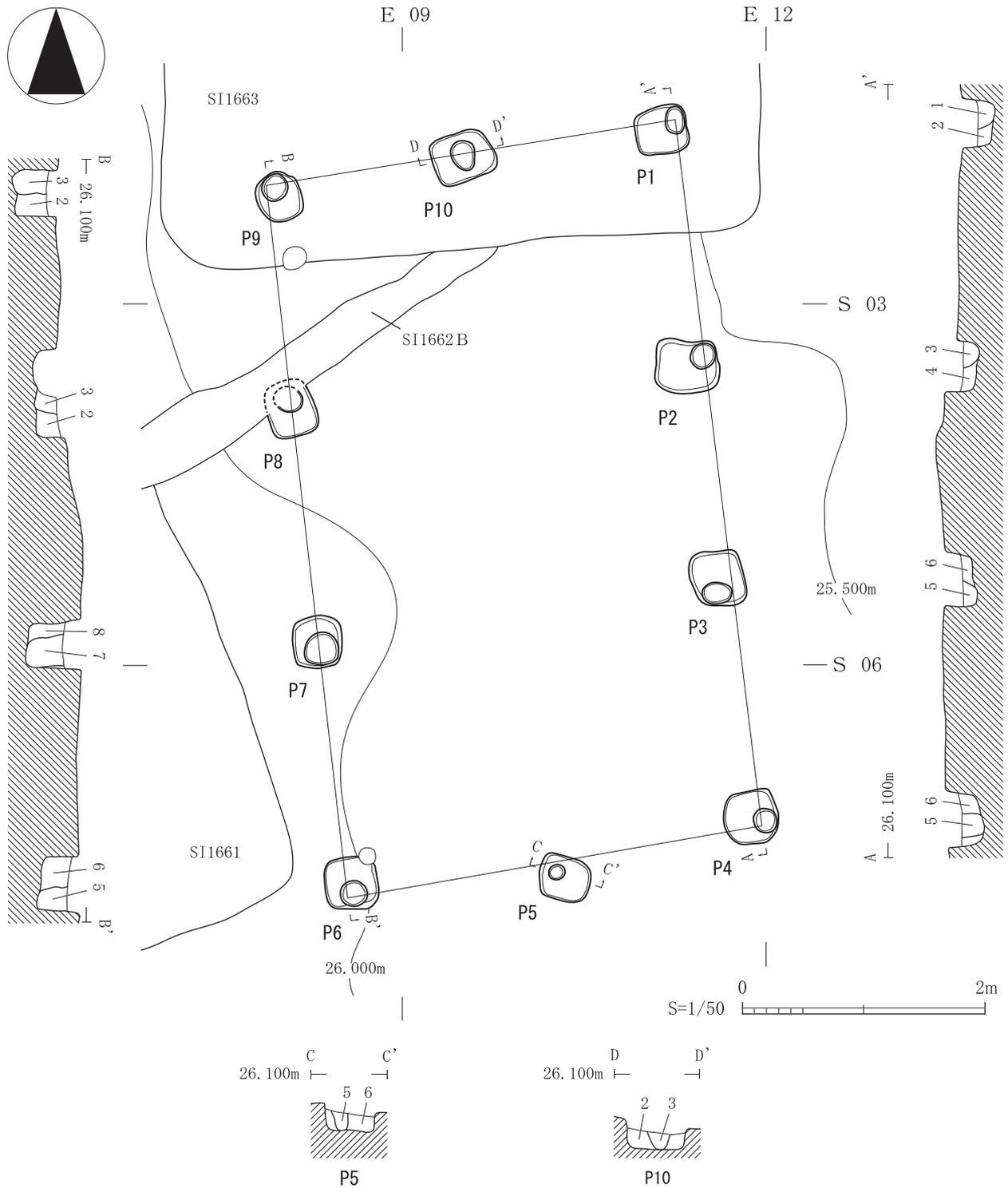
番号	種類	層位	特 徴		口 径 残存率	底 径 残存率	器 高	写 真 版 数	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	土師器・杯	床面	口縁部：ヨコナデ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.2) 4/24	—	8.2	8-4	R16	
2	土師器・甕	1層	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ	(13.6) 5/24	6.7 24/24	12.0	8-8	R17	内面に付着物
3	砥 石	1層	長さ:14.4 幅(最大):6.7 厚さ(最大):4.0 砥面4面 線状痕あり 砂岩					—	R85	

第11図 S I 1665住居跡出土遺物

南妻で総長約3.5m、柱間は西から約1.7m、約1.8mである。掘り方は、平面形がほぼ方形である。規模は一辺37～50cmであるが、40～45cmに収まるものが多い。検出面からの深さは24～35cmである。すべての柱穴で柱が抜き取られた痕跡が確認できる。柱穴埋土は、掘り方がにぶい黄褐色土、抜き取り穴が褐色土及び暗褐色土で、いずれも地山土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。遺物は、P10の埋土中から土師器甕、須恵器杯、須恵系土器杯が出土しているが、いずれも小破片である。

#### S B 1667建物跡

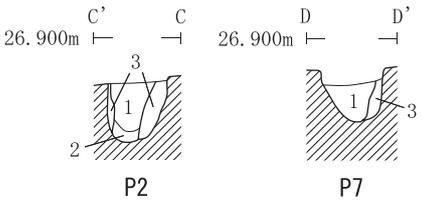
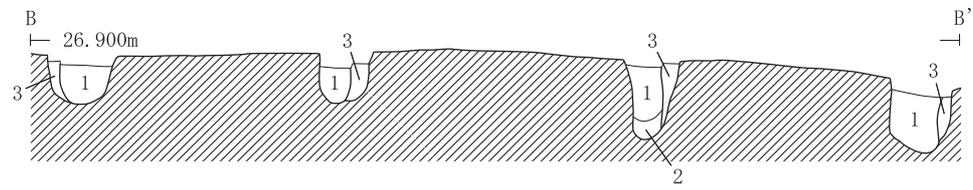
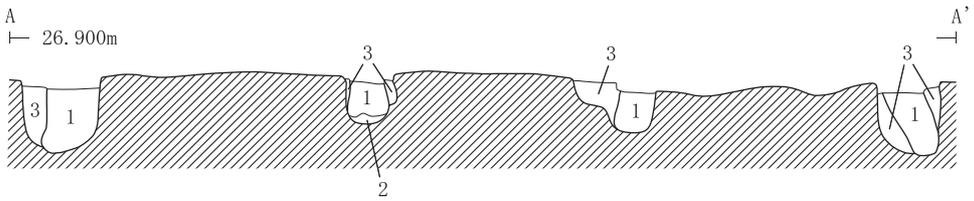
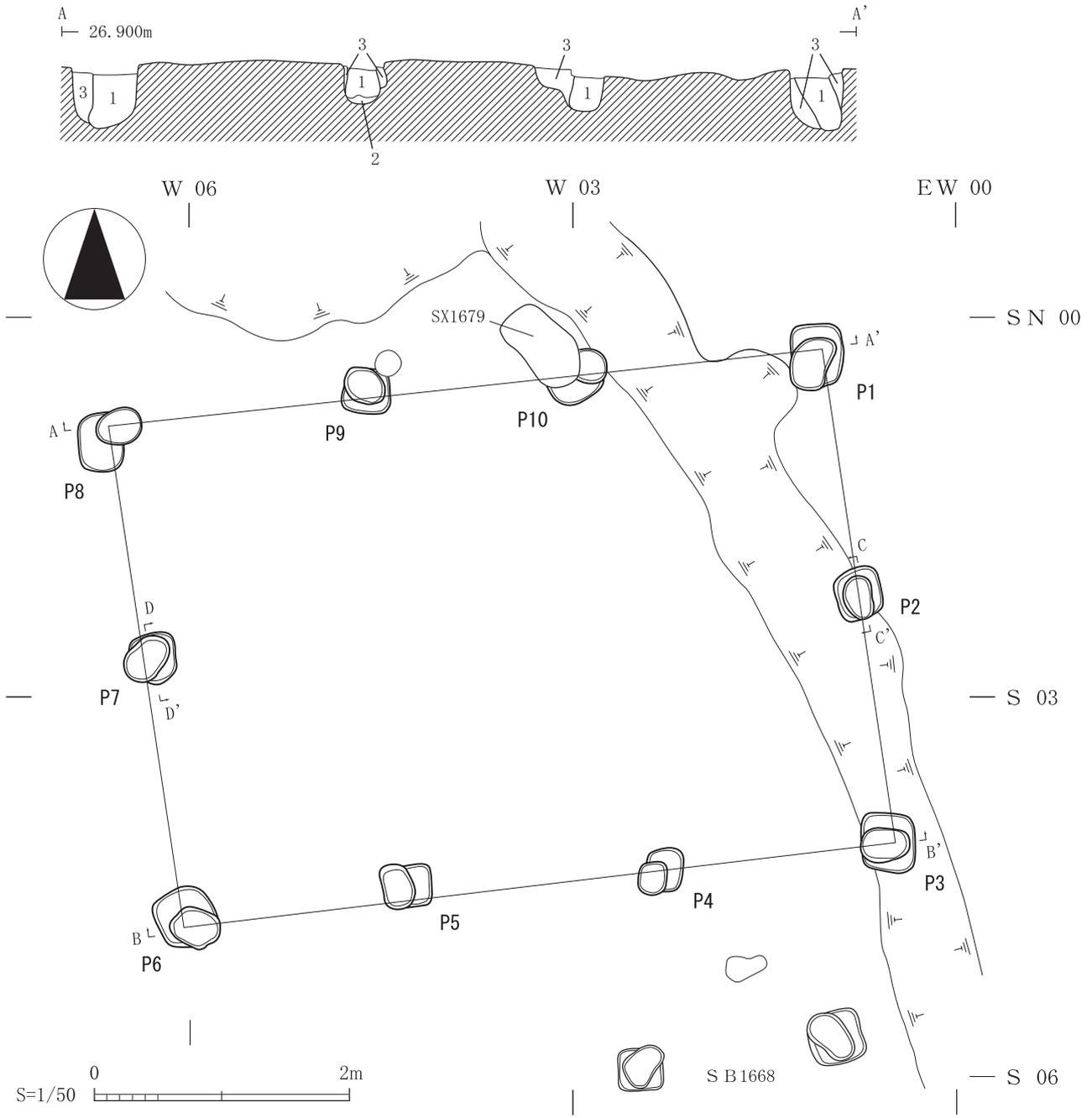
西部の地山上で検出した東西3間、南北2間の東西棟である。S X 1679と重複し、これより古い。方向は、東妻でみると北で約9度西に偏している。桁行については、北側柱列で総長約5.7m、柱間は西から約2.1m、約1.7m、約1.9m、南側柱列で総長約5.7m、柱間は西から約1.8m、約2.0m、約1.9mである。一方、梁行については東妻で総長約4.0m、柱間は北から約1.9m、約2.1m、西妻で総長約4.0m、柱間は北から約1.9m、約2.1mである。掘り方は、平面形がほぼ方形である。規模は一辺28～46cmであるが、40cm



土層観察表

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
1	暗褐色土	にぶい黄橙色土を斑状及び小ブロック状に含む。柱抜き穴。	5	褐色土	黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。柱抜き穴。
2	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙色土を斑状及び小ブロック状に含む。また、炭化物を若干含む。柱穴掘り方。	6	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。柱穴掘り方。
3	暗褐色土	にぶい黄橙色土を斑状に若干含む。柱抜き穴。	7	黒褐色土	黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。柱抜き穴。
4	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙色土を斑状及び小ブロック状に含む。柱穴掘り方。	8	暗褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。柱穴掘り方。

第12図 S B 1666建物跡実測図



**土層観察表**

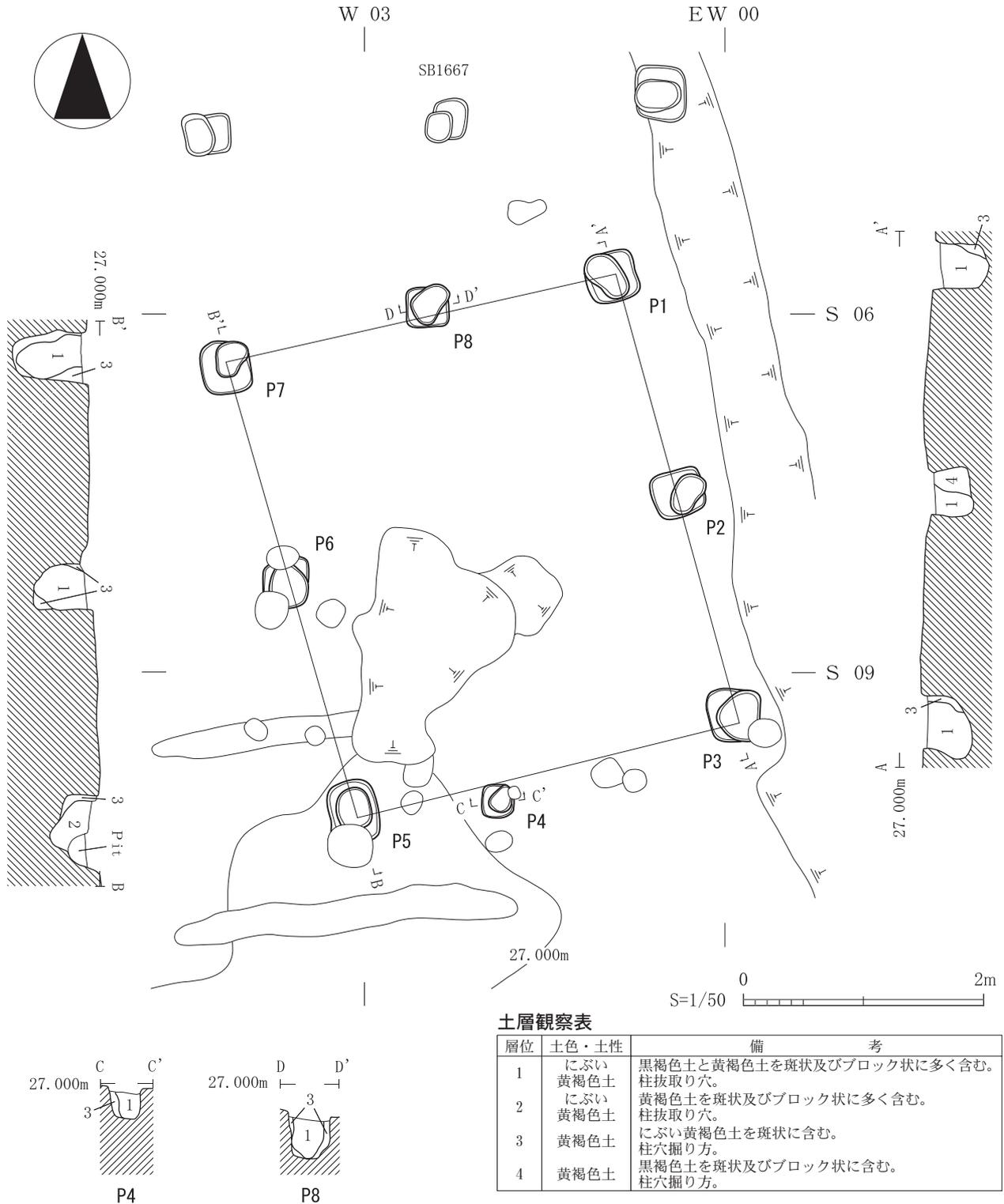
層位	土色・土性	備考
1	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。柱抜き穴。
2	黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。柱抜き穴。
3	黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。柱穴掘り方。

第13図 S B 1667建物跡実測図

前後のものが多い。検出面からの深さは32~52cmである。すべての柱穴で柱が抜き取られた痕跡が確認できる。柱穴埋土は、掘り方が黄褐色土、抜き取り穴が黄褐色土及びにぶい黄褐色土で、いずれも地山土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

### S B 1668建物跡

南西部の地山上で検出した南北2間、東西2間の南北棟である。方向は、東側柱列でみると北で約16度



第14図 S B 1668建物跡実測図

西に偏している。桁行については、東側柱列で総長約3.7m、柱間は北から約1.9m、約1.8m、西側柱列で総長約3.8m、柱間は北から約1.9m、約1.9mである。一方、梁行については北妻で総長約3.3m、柱間は西から約1.7m、約1.6m、南妻で総長3.3m、柱間は西から約1.2m、約2.1mである。掘り方は、平面形がほぼ方形である。規模は、一辺27～48cmで、40～45cmのものが多い。検出面からの深さは28～62cmで、40～50cmのものが多い。すべての柱穴で柱が抜き取られた痕跡が確認できる。なお、南妻の中央柱穴のみ他に比べて著しく小さく、一辺約27cm、検出面からの深さは28cmである。また、この柱穴は柱列の一方に寄って配置されるなど他の柱穴と異なるあり方を示す。柱穴埋土は、掘り方は黄褐色土で、地山土を斑状に含んでいる。抜き取り穴はにぶい黄褐色土で、地山土と黒褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

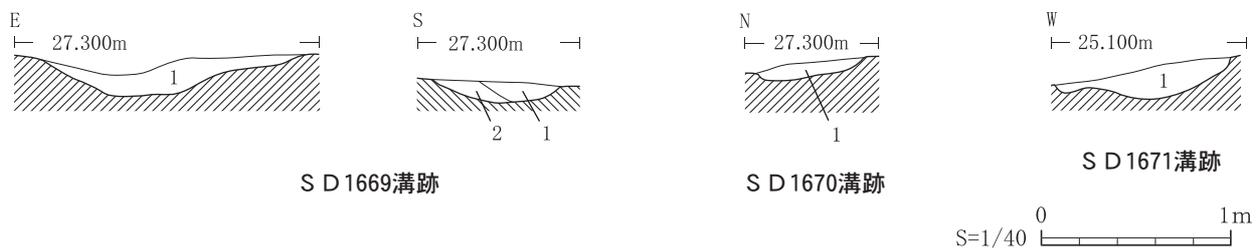
### (3) 溝 跡

#### S D 1669 溝跡

南西部の地山上で検出した溝跡である。西側と南側はそれぞれ調査区外に延びている。S D 1670 溝跡と重複し、これより新しい。確認できた長さは約6.4mである。南側で幅が著しく広がり、上幅63～185cm、下幅25～47cmを計る。検出面からの深さは12～25cmである。底面は丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上がる。平面で見ると南側ほど壁の出入りが顕著で、壁面にも凹凸がみられる。埋土は、北側がにぶい黄褐色土と黄褐色土に分けられるのに対し、南側はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は、ロクロ調整の土師器甕の小破片が若干出土している。

#### S D 1670 溝跡

南西部の地山上で検出した溝跡である。南北方向の溝に、東西方向の溝がほぼ直角に接続する。これより南側はS D 1669 溝跡と重複し、これによって壊されているため不明である。方向は、南北方向で見ると北で約19度西に偏している。確認できた長さは南北方向で約3.4m、東西方向で約3.3mである。規模は両者を通して見ると、上幅48～62cm、下幅15～30cmを計る。検出面からの深さは東西方向で3～10cm、南北方向で8～19cmである。底面は丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上がる。平面で見ると壁の出入りが顕著である。埋土は、にぶい黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。



#### 土層観察表

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
S D 1669埋土			S D 1670埋土		
1	にぶい黄褐色土	地山粒を含む。また、炭化物を若干含む。	1	にぶい黄褐色土	地山粒を若干含む。
2	黄褐色土	地山粒を含む。	S D 1671埋土		
			1	黒褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。

第15図 溝跡実測図

#### S D1671溝跡

北西部の地山上で検出した南北方向に斜行する溝跡である。S I 1665住居跡と重複し、これより新しい。北側が調査区外にさらに延び、また南側では削平のため途切れる箇所がある。確認できた長さは約14.5mである。方向は、北で約33度東に偏している。北側ほど幅広くなり、上幅40～95cm、下幅20～35cmを計る。検出面からの深さは、南端で2cm、北側で35cmを計り、北側ほど深い。その比高は約85cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。平面で見ると所々で壁の出入りが認められる。埋土は、地山土を斑状及びブロック状に含む黒褐色土の単層である。遺物は、須恵器瓶と青磁の小片が出土している。

#### (4) 土 壙

##### S K 1672土壙

西部の地山上で検出した土壙である。平面形は楕円形である。規模は、長径1.24m、短径0.78m、深さは約0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。埋土は大きく3層に分けられる。上層はにぶい黄褐色土で、炭化物、焼土粒を含んでいる。壁際から底面にかけては、薄い焼土層と3～6cmの厚さの炭化物層が堆積している。埋土中に炭化物や焼土が多く含まれるが、壁面及び底面では直接火熱を受けた明瞭な痕跡は確認できない。遺物は、須恵系土器杯の小破片1点のみが出土している。

##### S K 1673土壙

西部の地山上で検出した土壙である。平面形はほぼ円形である。規模は、径1.06～1.12m、深さは約0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。埋土は3層に分けられる。1層はにぶい黄褐色土、2層は灰黄褐色土で、ともに炭化物、焼土粒を含んでいる。また、2層は地山土等を斑状及びブロック状に含んでいる。3層は厚さ約5cmの炭化物層で、南壁際に堆積している。埋土中に炭化物や焼土が多く含まれるが、壁面及び底面では直接火熱を受けた明瞭な痕跡は確認できない。遺物は、非ロクロ調整の土師器甕の小破片1点のみが出土している。

##### S K 1674土壙

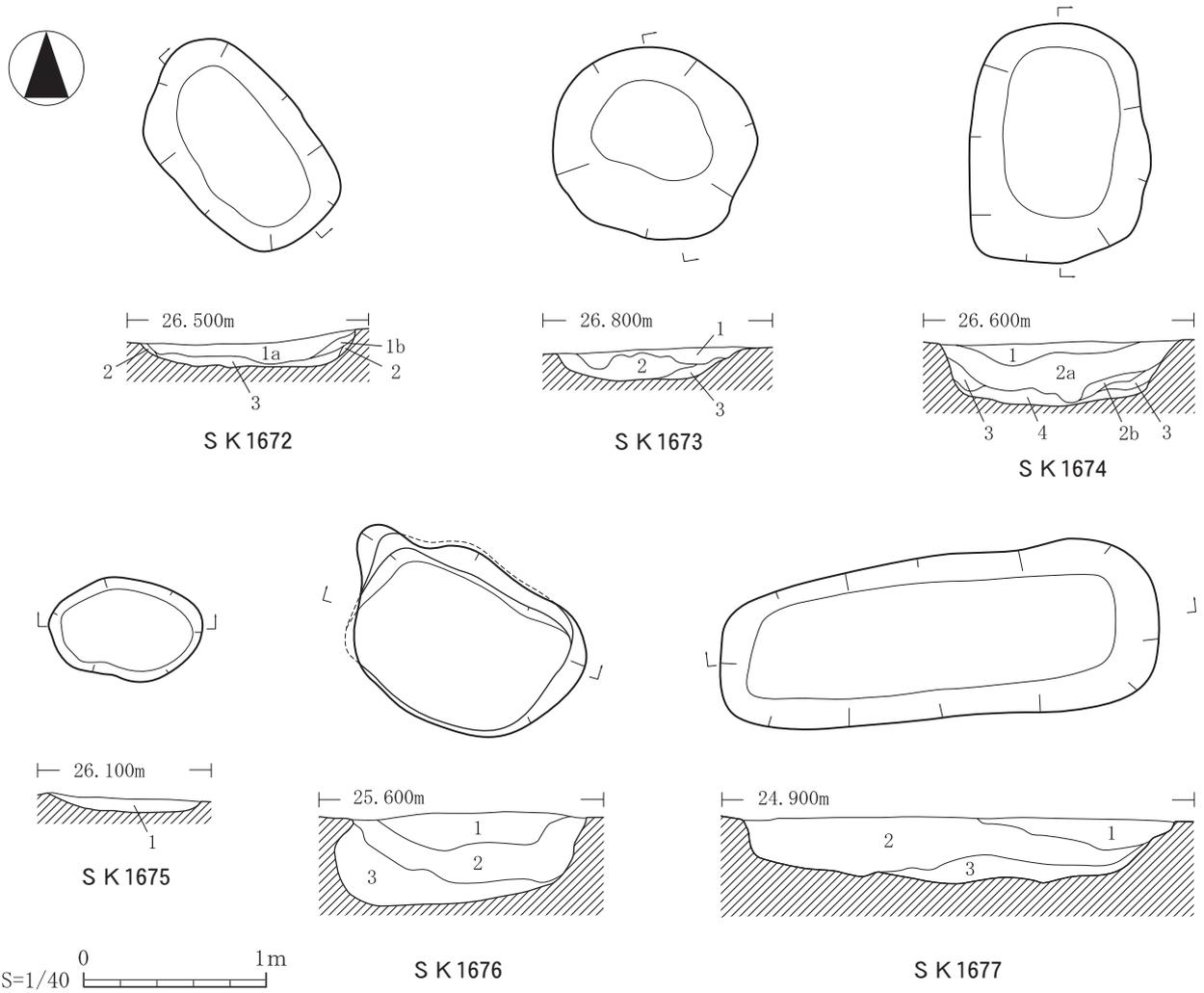
西部の地山上で検出した土壙である。平面形は楕円形である。規模は、長径1.32m、短径0.95m、深さは約0.35mである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は大きく4層に分けられる。1層は黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土で、ともに炭化物、焼土粒を含んでいる。また、2層は地山土を斑状及びブロック状に含んでいる。3層は焼土層、4層は炭化物層で、厚さは両者とも4～8cmである。しかし、壁面及び底面では直接火熱を受けた明瞭な痕跡は確認できない。遺物は、ロクロ調整の土師器杯、須恵器瓶の小破片が若干出土している。

##### S K 1675土壙

中央部の地山上で検出した土壙である。平面形は楕円形を呈するが、形はくずれ気味である。規模は、長径84cm、短径55cm、深さは約8cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。埋土は、地山土を斑状にわずかに含むにぶい黄褐色土の単層である。遺物は、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の小破片が出土している。

##### S K 1676土壙

北西部の地山上で検出した土壙である。平面形は楕円形であるが、北西側で形がくずれている。規模は、長径1.25m、短径0.94m、深さは0.48mである。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。西壁底



土層観察表

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
SK 1672埋土			3	暗赤褐色土	焼土層。黄褐色土を斑状に若干含む。また、炭化物を若干含む。
1a	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土粒を含む。	4	黒色土	炭化物層。黄褐色土を斑状に含む。また、焼土粒を含む。
1b	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土粒を多く含む。	SK 1675埋土		
2	暗赤褐色土	焼土層。	1	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に若干含む。また、炭化物を若干含む。
3	黒色土	炭化物層。にぶい黄褐色土を若干含む。	SK 1676埋土		
SK 1673埋土			1	にぶい黄褐色土	上部に灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む。
1	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土粒を若干含む。	2	黒褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。
2	灰黄褐色土	にぶい黄褐色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物、焼土粒を含む。	3	灰黄褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。
3	黒色土	炭化物層。黄褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含む。また、焼土粒を含む。	SK 1677埋土		
SK 1674埋土			1	黒褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。上面に灰白色火山灰の薄い層が堆積。
1	黒褐色土	炭化物、焼土粒を若干含む。	2	にぶい黄褐色土	黒褐色土を斑状及びブロック状に含む。
2a	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物、焼土粒を若干含む。	3	黒褐色土	にぶい黄褐色土を斑状に若干含む。
2b	にぶい黄褐色土	黄褐色土を斑状に多く含む。また、炭化物、焼土粒を多く含む。			

第16図 土壌実測図

面近くでは奥に入り込む様相をみせるが、これは崩落によるものと推測される。埋土は3層に分けられる。1層の上部には灰白色火山灰が斑状及びブロック状に含まれる。2層は黒褐色土、3層は灰黄褐色土で、ともに地山土を斑状及びブロック状に含んでいる。これらは、堆積の状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

#### S K 1677 土壙

北西部の地山上で検出した土壙である。平面形は長方形に近い。規模は、長辺2.42m、短辺0.89m、深さは0.32～0.38mである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは比較的急であるが、東壁のみは緩やかな立ち上がりを見せる。埋土は3層に分けられる。検出面においては灰白色火山灰を確認できる。2層はにぶい黄褐色土で、周囲の地山に非常に近似した土層であるが、黒褐色土を斑状及びブロック状に含むことから人為的な埋め戻し土と考えられる。3層は黒褐色土で、地山土を斑状にわずかに含んでいる。遺物は、須恵器甕の小破片1点のみが出土している。

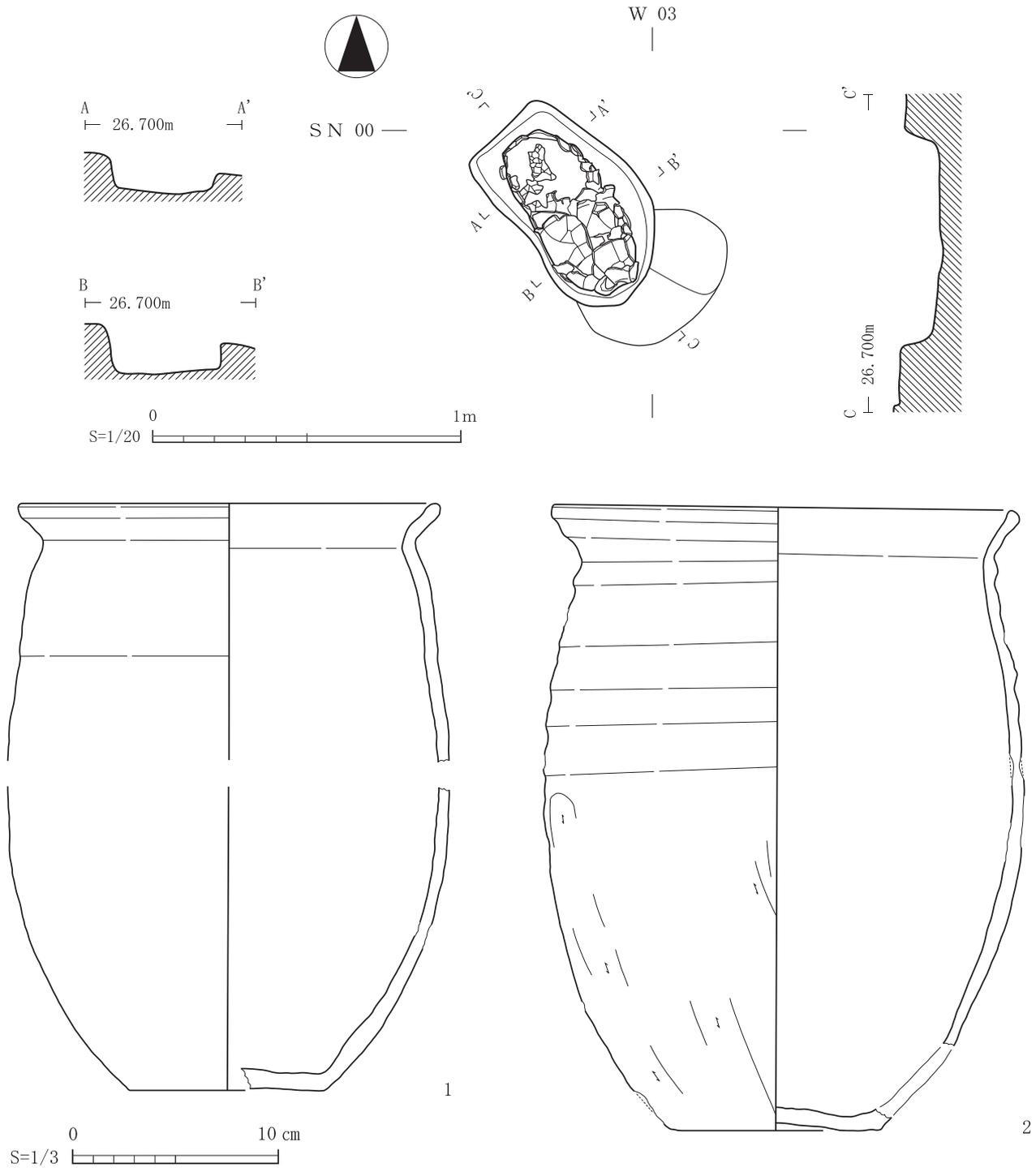
### (5) 土器埋設遺構

#### S X 1679

西部の地山上で検出した土器埋設遺構である。S B 1667建物跡と重複し、これより新しい。2個体の土師器甕の口縁部を合わせて、横位に埋設したものである。掘り方底面につぶれた状態で出土しており、削平のため一方の甕は上の部分が失われている。掘り方の平面形は長方形に近い。方向は、長軸線でみると北で約36度西に偏している。規模は長辺68cm、短辺37～40cm、検出面からの深さは約10cmである。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は、黄褐色土の単層である。また、甕内部の土も同様の黄褐色土で、内容物等は確認できなかった。埋設された土師器甕のうち、南側のものはロクロによる凹凸が非常に顕著であり、体部下半は縦方向にヘラケズリされている。一方、北側のものは一回り小型であり、摩滅が著しいためロクロ調整を確認できる以外、詳細は不明である。

#### S X 1680

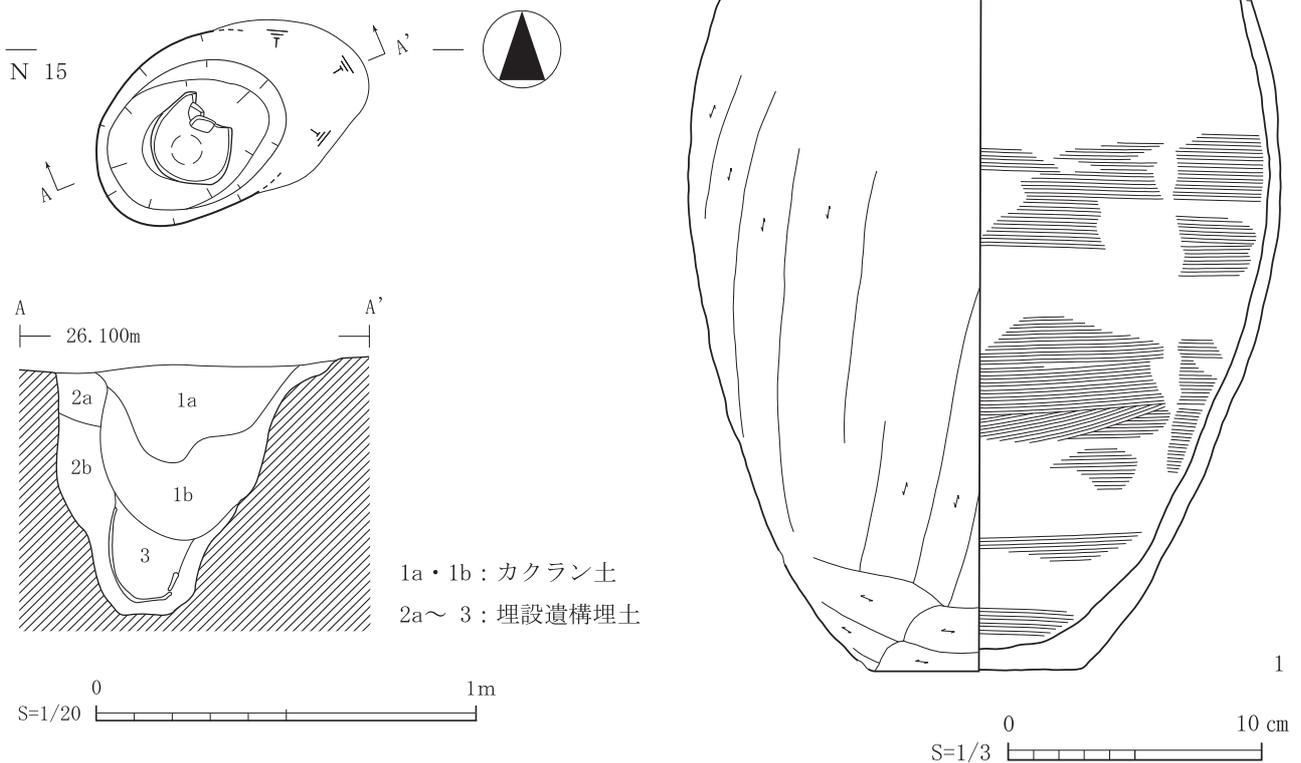
中央部北寄りの地山上で検出した土器埋設遺構である。掘り方底面に正位で埋設された土師器甕の下半部を検出した。掘り方東半部が、攪乱によると思われる落ち込みと重複している。これによって甕の上半部も壊されており、併せて遺構の上部の状況も知り得ない。規模は長径48cm以上、短径約45cmで、平面形は楕円形を呈すると推定される。検出面からの深さは約65cmである。底面はほぼ平坦であり、壁はわずかに内湾しながら立ち上がり、円筒状を呈する。底面から約20cm上で段を有し、その上方は径が一回り大きくなる状況が認められる。掘り方埋土は2層に分けられるが、大きくみればにぶい黄褐色土の単層である。全体的に地山土を斑状に含んでいる。また、甕内部の土は褐色土で、内容物等は確認できなかった。埋設された土師器甕はロクロ調整されており、体部外面にはヘラケズリが、内面にはロクロ回転によるハケメが施されている。



単位：cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・甕	-	ロクロナデ 体部下半：摩滅のため不明	ロクロナデ	20.2 20/24	9.4 12/24	-	9-1	R 18	北側に埋設
2	土師器・甕	-	ロクロナデ 体部下半：ヘラケズリ	ロクロナデ	22.1 20/24	10.2 24/24	30.6	9-2	R 19	南側に埋設

第17図 S X 1679土器埋設遺構実測図



単位：cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 真版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・甕	-	ロクロナデ 体部：ヘラケズリ	ロクロナデ 体部：回転ハケメ	-	8.2 24/24	-	9-3	R 20	

第18図 S X 1680土器埋設遺構実測図

## (6) 窯跡

### S R 1678窯跡

〔位置・重複〕 調査区東側斜面の標高21.1～24.8mに位置する。重複する遺構はない。

〔構造〕 地山を掘り抜いた地下式窯である。上方から煙道部、焼成部、燃焼部と続くが、焚口付近から前底部にかけては削平のため残存しない。さらに、その延長部は調査区外にかかるため、灰原も確認できない。

〔方向〕 窯体の長軸は東西方向で、中心線でみると東で約6度南に偏する。

〔平面形・規模〕 煙道部から燃焼部にかけて残存し、長さは約9.5mである。平面形は焼成部中央付近に最大幅（改修前：1.98m、改修後：2.15m）をもつ、いわゆる胴張り形を呈する。幅は、上・下双方に向かって徐々に狭まり、煙道部との境付近で約0.8m、一方、燃焼部との境付近では1.2～1.4mを計る。

〔断面形〕 縦断面をみると、燃焼部から焼成部中頃にかけての床面の傾斜角度は非常に緩やかである。その後傾斜がややきつくなり、さらに焼成部西端付近でもう一度傾斜角度を強くして奥壁に至る。全体的には弓状を呈する。次に横断面をみると、両側壁とも床面から内湾しながら立ち上がることから、アーチ状を呈していたと推定される。

〔焼成面〕 3面確認した。下層から順に1次床面、2次床面、3次床面とした。1次床面は単独では燃焼部においてのみ認められる。その範囲は残存部東端から西に約0.7mまでである。これ以外の箇所では

2次床面と同一面で重複する。3次床面は、1・2次床面に嵩上げて造られており、その範囲は残存部東端から焼成部にかけての約7.3mである。続く焼成部西端付近から煙道部にかけては、1・2次床面と基本的に同一面で重複する。次に長軸線上で傾斜角度をみると、燃焼部では1次床面が焚口近くとみられる残存部東端から西に向かって約3度下方に傾斜する。2次床面は約8度下方に傾斜した後、ほぼ水平になる。これに対して、3次床面は残存部東端から緩やかながら立ち上がっており、その角度は約3度である。次に、焼成部東半では1・2次床面が約5度、3次床面が約9度の傾斜で立ち上がる。続く、焼成部西半では1・2次床面が約21度、3次床面が約19度で立ち上がり、いずれも傾斜がややきつくなっている。さらに、3面が重複する焼成部西端付近から煙道部にかけては約39度の傾斜をもち、その後奥壁が約77度の角度で立ち上がる。

〔天井部〕 すべて窯体内に崩落している。崩落土の断面観察では窯体内側にあたる下面が2～3cmの範囲でオリブ灰色～暗青灰色に還元され硬化している。その外側は4～5cmの範囲で橙色～赤褐色に変色している。また、焼成部中央付近では北側壁が3次床面から80～90cmの高さまで残存しているが、この箇所推定すると天井の高さは約1.2mとなる。

〔堆積土〕 23層に区分した。1～3層は崩落土であり、特に3層は天井部が一気に崩落したものである。4～9層は煙出し付近からの流入土と考えられる。10～13層は3次床面の燃焼部から焼成部を覆っている土層で、焼土、炭化物、窯壁の破片、地山塊、小礫を含んでいる。また、若干ではあるが遺物も出土している。14層は厚さ10～15cmの炭化物層で、3次床面に伴う熾の堆積及びかき出しによるものと考えられる。15層は灰色に還元され硬化した土層で、3次床面での小補修に伴うもの。また、16層は15層の下に薄く堆積する炭化物層で、小補修直前の焼成に伴うものと推測される。18a～18e層は3次床面に伴う嵩上げ土で、厚さは最大35cmである。このうち、18a層上面が3次床面で、灰色～青灰色に還元され硬化している。また、18層中には全体的に窯壁碎片が含まれているが、特に、18c～18e層の層理面に集中することから、3～4回に分けて嵩上げ作業を行い、その都度窯壁碎片を意図的に敷いたものと推測される。20層と22層は炭化物層で、厚さは前者が4～10cm、後者が約2cmである。それぞれ2次床面と1次床面に伴う熾の堆積及びかき出しによるものと考えられる。また、21層は2次床面に伴う嵩上げ土で、炭化物や小礫を含んでいる。厚さは4～6cmである。なお、各床面に伴う炭化物層の厚さがそれぞれ異なることや、3次床面で小補修の痕跡が認められることなどから、床面の数と焼成の回数が一致するものではないことがわかる。

〔煙道部〕 平面で見ると、焼成部に比べ著しく幅が狭まり、突起状に張り出す形態を呈する。煙出し穴は、残存部及び天井崩落土や流入土の状況から東西に長い楕円形と推定される。長径は崩落のため不明であるが、短径は68cmを計る。また、煙出し穴を構築する際には、周囲を一回り大きく掘り込んだ後、地山粒を含む褐色粘土を10～20cmの厚さで貼り付け、成形している状況が確認できる。この他の床面や側壁は地山をそのまま使用しているが、大小の礫を多量に含む地山層であるため凹凸が顕著である。次に縦断面で見ると、床面は焼成部と同じ傾斜角度をもち、奥壁に至った後比較的急に立ち上がる。また、1・2次床面では緩やかな階段状を呈するのに対し、3次床面ではこの箇所に褐色土を貼り付け、なだらかな斜面に改修している。なお、1・2次床面の2箇所の平坦面にはやや扁平な石が置かれている状況がみられた。用途は不明である。

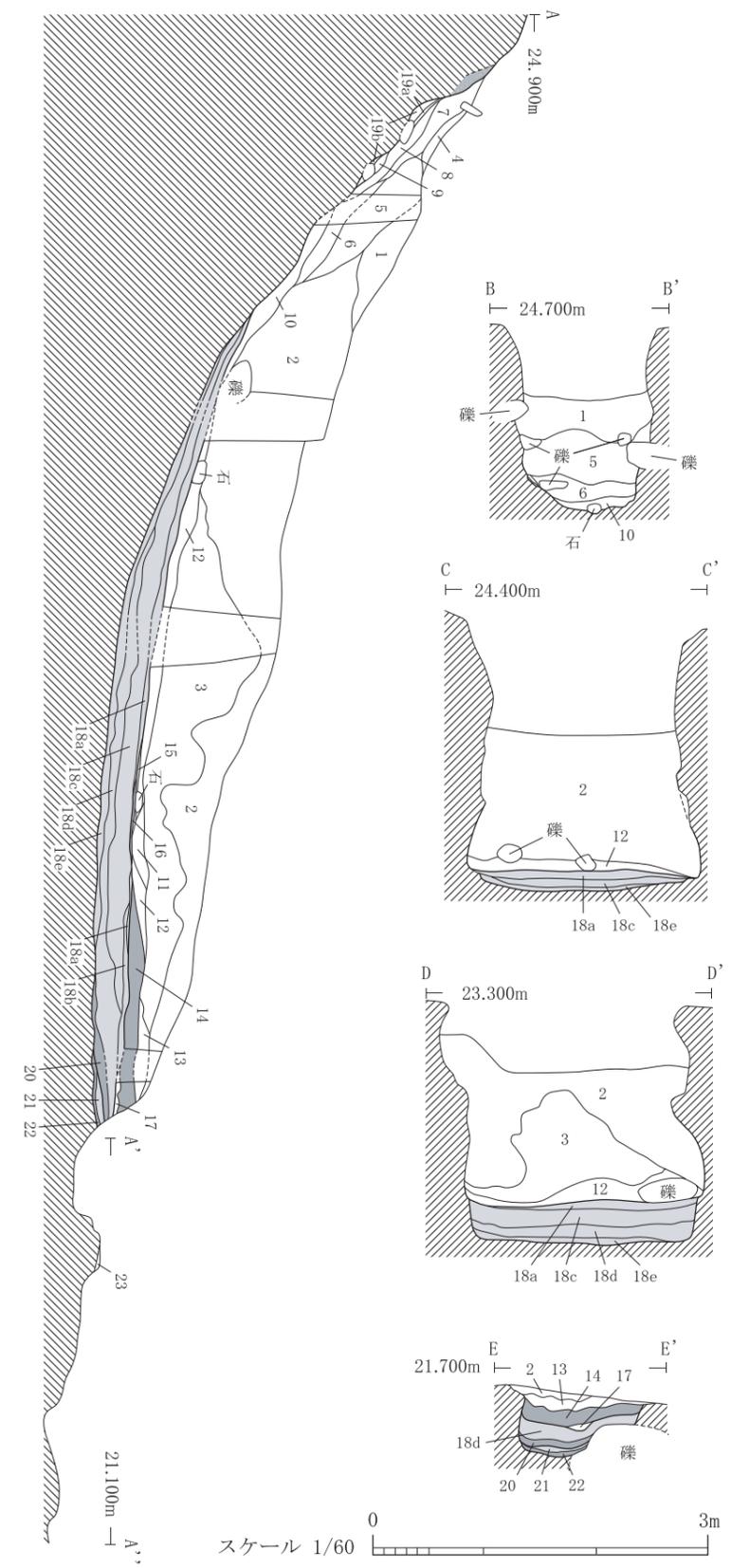
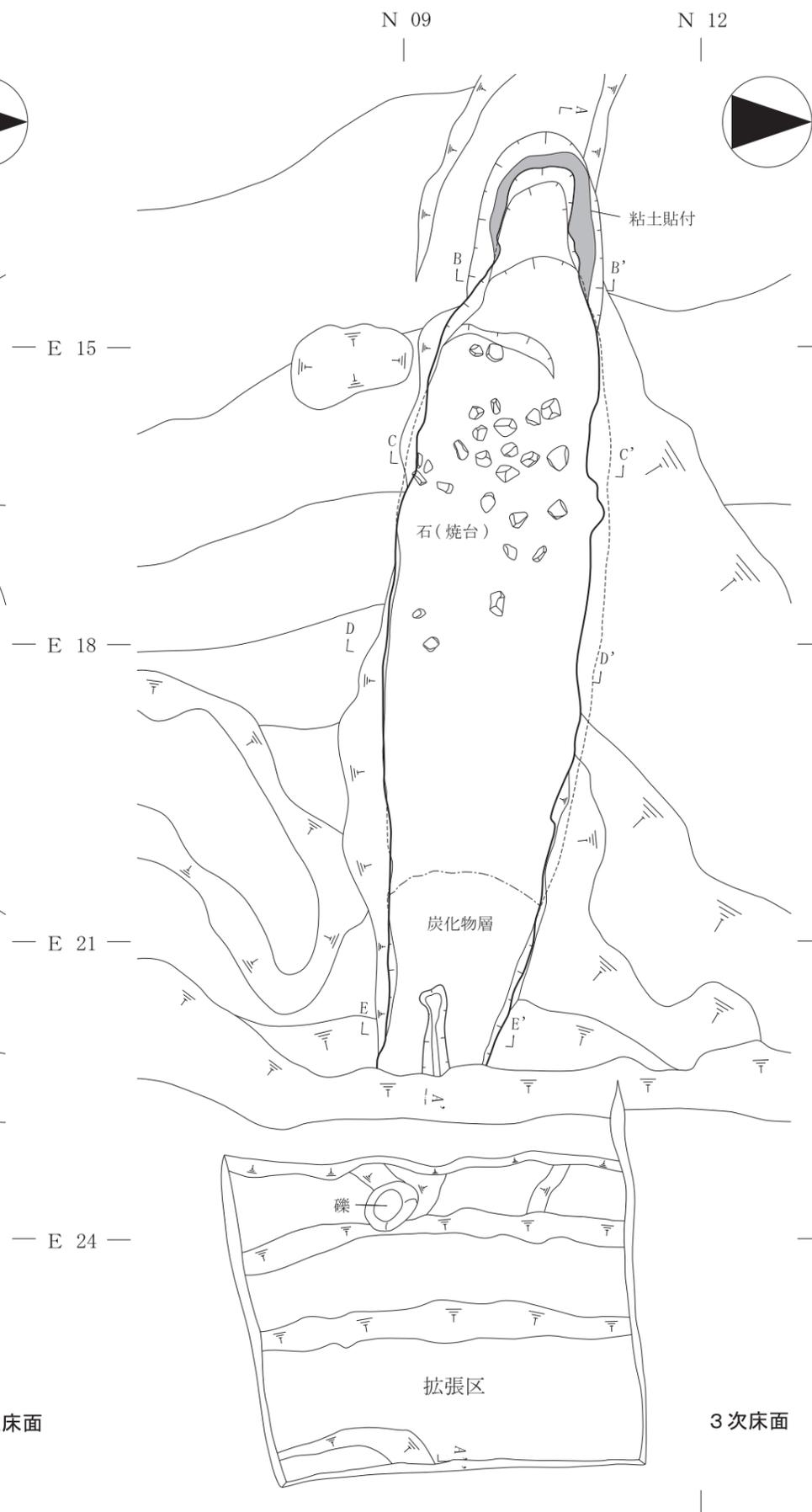
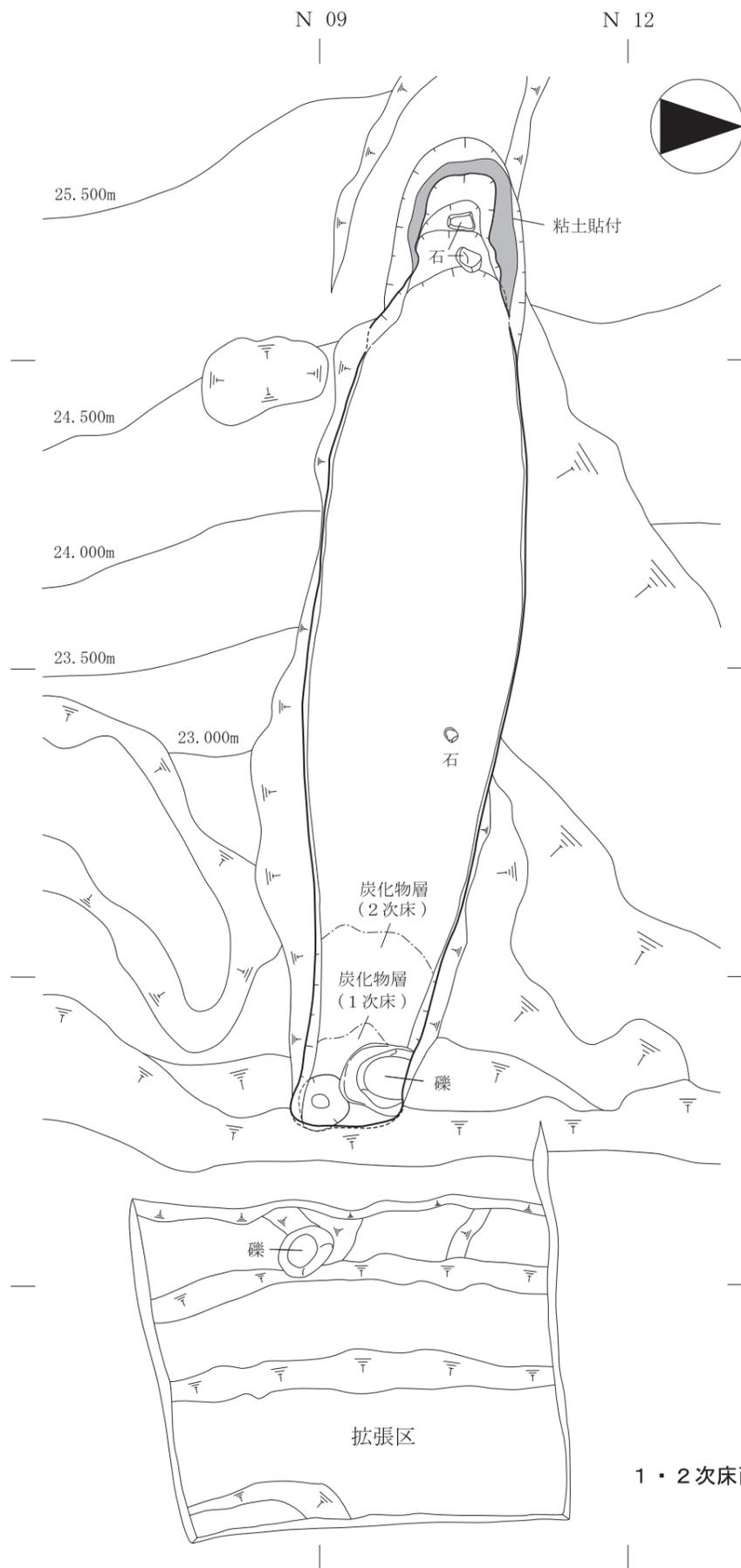
〔焼成部〕 1・2次床面とそれに伴う側壁、及び3次床面に伴う側壁は、地山をそのまま使用している。焼成部付近の地山層は均質な砂質の土層であるため、表面は比較的平坦である。いずれも、灰オリブ色

～暗青灰色に還元され硬化している。特に、3面が同一面で重複する煙道部近くでは硬化が著しい。1・2次床面に最大35cm嵩上げて3次床面を造っているが、その際両側壁についても4～14cm外側の位置に新たに造り直している。この結果、1・2次床面では幅が最大1.98mであったのに対し、3次床面では最大2.15mに拡幅されている。なお、3次床面に伴う側壁については北側壁が良好に残っており、床面から最大92cmの高さまで残存している。これに対して、南側壁は全体的に崩落しており、最も著しい箇所では高さ約10cmの残存にすぎない。床面の状況は、全体的に凹凸がほとんどみられない平坦な面であるが、3次床面の東半部では硬化面が剥がれている箇所が数ヶ所で認められる。また、3次床面の西半部を中心に、拳大から人頭大の石がある程度の間隔をもって置かれている状況を確認した。これらは床面に熔着しており、配置等の状況と合わせて、焼台に使用されたものと考えられる。

〔燃焼部〕 焼成部との境は明瞭には認められない。ただし、長軸線上で各床面に伴う炭化物層の範囲をみると、焚口近くとみられる残存部東端から西に向かって、1次床面が約0.8m、2次床面が約1.9m、3次床面が約2.2mを計る。1次床面と各床面に伴う側壁は、地山をそのまま使用している。なお、燃焼部付近の地山層中には、所々に大きな風化円礫が含まれている状況がみてとれる。残存部東端近くの北側壁際には径70cm以上の円礫が露出しており、これが1次床面と2次床面においては燃焼部の床面積を狭めている。この円礫については、周囲を打ち欠いてやや平坦に整形している痕跡が認められる。床面の状況を見ると、1次床面では円礫と南側壁の間に直径約50cm、深さ約10cmの円形の窪みが確認できる。また、2次床面は残存部東端から西に約55cmの範囲で、4～6cm嵩上げて造られている。床面はほぼ平坦である。3次床面は、円礫を覆い隠すように10～32cm嵩上げて造られており、中央部には幅18～28cm、深さ約5cmの東西方向の溝が延びている。確認できる長さは残存部東端までの約90cmで、下方にさらに延びる様

層位	土色・土性	備 考	層位	土色・土性	備 考
1	明褐色土	崩落土。地山塊を含む。	15	灰色土	灰色に硬化。砂と窯壁碎片を含む。3次床面上層の嵩上げ土。
2	にぶい黄褐色土	崩落土。地山塊や礫を多量に含む。	16	黒色土	炭化物層。
3	にぶい黄色土	天井部崩落土。	17	にぶい黄色粘質土	同色の砂質土を含む。3次床面に伴う溝の埋土。
4	にぶい赤褐色土	にぶい黄褐色土を斑状及びブロック状に含む。焼土を多量に含む。また、炭化物を若干含む。	18a	灰 オリーブ土	灰色に硬化。砂と窯壁碎片を含む。3次床面の嵩上げ土。
5	にぶい黄褐色土	地山塊を含む。また、炭化物、焼土塊を含む。	18b	赤褐色土	赤変している。窯壁碎片を含む。3次床面の嵩上げ土。
6	褐色土	地山塊を含む。また、焼土を斑状に含む。	18c	褐色土	上部は赤変している。窯壁碎片を含む。3次床面の嵩上げ土。
7	褐色土	炭化物、焼土を含む。	18d	にぶい黄褐色土	窯壁碎片を含む。3次床面の嵩上げ土。
8	褐色土	地山塊を若干含む。また、炭化物、焼土を含む。	18e	褐色土	窯壁碎片を含む。3次床面の嵩上げ土。
9	黒色土	炭化物を含む。	19a	灰色土	灰色に硬化。砂と窯壁碎片を含む。煙道部付近の3次床面嵩上げ土。
10	褐色土	礫を含む。また、灰色に硬化した窯壁片を含む。遺物を含む。	19b	褐色土	窯壁碎片を含む。煙道部付近の3次床面嵩上げ土。
11	にぶい黄色土	崩落土。	20	黒色土	炭化物層。 2次床面に伴う熾の堆積及びかき出し層。
12	褐色土	地山塊や礫を含む。また、窯壁片を含む。遺物を含む。	21	褐色土	小礫を含む。また、炭化物を含む。2次床面の嵩上げ土。
13	にぶい黄褐色土	炭化物、焼土を含む。	22	黒色土	炭化物層。褐色土を斑状に若干含む。1次床面に伴う熾の堆積及びかき出し層。
14	黒色土	炭化物層。 3次床面に伴う熾の堆積及びかき出し層。	23	灰黄褐色土	炭化物を含む。前底部の埋土。

表3 S R 1678窯跡土層観察表 (第19図に対応)



第19図 S R 1678窯跡実測図

相をみせる。側壁は、残存部東端から西に約50cmの範囲で赤褐色に変化し、やや硬くしまっている。

〔前底部〕 削平によって失われており、ごく狭い範囲に埋土が薄く認められるだけである。

〔出土遺物〕 須恵器と焼台が出土している。須恵器には杯・蓋・盤・瓶・甕がある。出土量は少なく、特に杯、蓋、盤はわずかの出土である。また、すべて破片であり完形のものはない。出土層については、杯、蓋、瓶がすべて3次床面上、盤が3次床面を覆う12層中、甕が各床面上と12層中である。

#### 杯

4点出土している。第20図1は丸底を呈するが、中心付近がやや平坦になるものである。体部との境は明瞭ではない。底部は粗く手持ちヘラケズリされ、切り離し痕はみられない。底部から体部にかけては非常に厚手であるが、口縁部では急激に厚みを減らし先細りとなる。口縁部の立ち上がりは直立気味である。第20図2も丸底を呈し、中心付近がやや平坦になるものである。底部にはヘラ切り痕がみられ、周縁のみ粗く手持ちヘラケズリされている。底部から体部にかけては非常に厚手であり、さらにその厚さは均一ではない。1と同様、口縁部で急激に厚みを減らしている。口縁端部を欠損するが、1に比べやや外側に開くものと考えられる。第20図3は口縁部から体部にかけての小破片である。外側に開き気味に立ち上がるものと推定される。また割れ口の状況から、1、2のように非常に厚い底部をもつものと考えられる。第20図4も口縁部から体部にかけての小破片である。丸味をもって、直立気味に立ち上がる。厚さは均一である。

#### 蓋

2点出土している（第20図5・6）。やや平坦な天井部をもち、口縁部が湾曲しながら端部にいたるものである。天井部と口縁部の境には稜を形成する。天井部は非常に粗く手持ちヘラケズリされており、器面には凹凸が目立つ。全体的に厚手であり、さらにその厚さも均一ではない。口縁部においては、厚みのある端部平坦面に沈線状に窪みを一周させることで、受け口状にしている。

#### 盤

1点出土している（第20図7）。口縁部から底部の一部にかけて残存する破片である。体部と底部の境に緩やかな稜を形成する。体部下方では、一部で粗く手持ちヘラケズリされている。全体的に厚手で、口縁端部は厚みをもったまま丸くおさまる。また、周縁が大きく波打つなど稚拙さが目立つものである。

#### 瓶

口縁部から頸部にかけての破片が2点出土している（第21図1・2）。1については、具体的な器種は不明である。口縁先端は比較的鋭くつまみ上げられており、その直下に隆帯状に細い粘土紐を貼り付け、その後ロクロによって口縁全体の形を整えている。2は、口径等から横瓶と推測される。口縁先端はわずかにつまみ上げられる様相をみせる。1と同様その直下に隆帯状に細い粘土紐を貼り付け、その後ロクロによって全体的には丸味をもった形に整えている。なお、横瓶については、このほか焼台に転用された体部の破片が9点出土している。すべて外面に平行叩き、内面に同心円状のあて具の痕跡が残るものである。

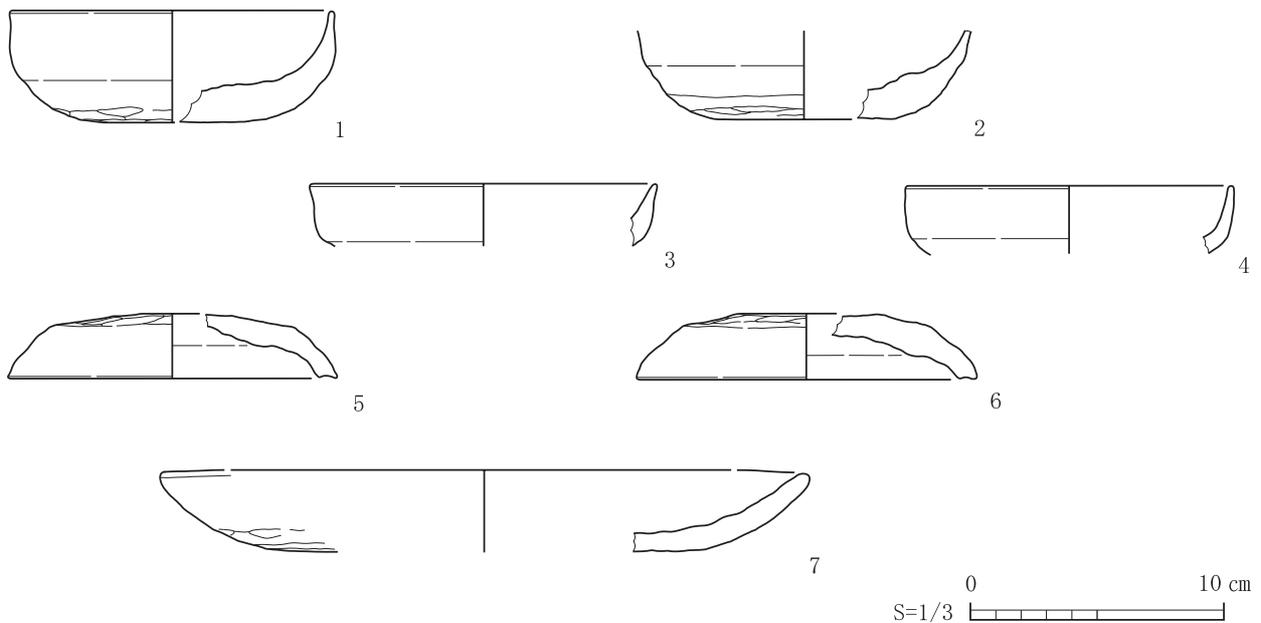
#### 甕

他の器種に比べ出土量は多い。1次床面と2次床面に伴う小破片5点のほかは、3次床面上とそれを覆う12層中からの出土である。また、焼成部全域からほぼ均等に出土している。口縁部から頸部にかけての破片は14点あり、すべて口縁部のすぐ下に櫛描き波状文が施されている。波状文は2段に施されているもの（第21図7）が1点ある以外は、すべて1段のもの（第21図3～6）である。なお、この中には1次床

面上と2次床面上出土のものが各1点ずつ含まれるが、小破片ということもあり3次床面上出土のものとの形態や技法上での違いは認められなかった。また、これら全体をみると、口縁端部の直下に隆帯状に細い粘土紐を貼り付け、その後ロクロによって口縁全体の形を整えるという点で共通している。しかし、粘土紐の箇所が下方に比較的鋭くつまみ出されるもの(3・4)と、丸味をもっておさまるもの(5~7)とに分けられる。これらは、ほぼ同数の出土である。次に体部の破片は、すべて外面に平行叩き、内面に同心円状のあて具の痕跡が残るものである。なお、体部破片は58点出土しているが、これらのうち焼台に転用された痕が明瞭に認められるものが半数以上にのぼる。

焼台 (第22図~第27図)

初めから焼台として製作されたものに、2次床面に伴う炭化物層(20層)から出土した粘土盤状のものがある(第22図4~6)。これらは不整形であり、また破損のため原形をとどめていないが、残存状況からみて一辺10cm以内の小形の焼台であったと推測される。このうち、4の凸面には甕等の製作の際に用いられるあて具によってつけられた同心円状の叩き痕が認められる。このほか、3次床面上と12層中から出土した、これより大形の焼台がある(第22図1・2)。2点とも板状で、平面で見ると弧を描くような形

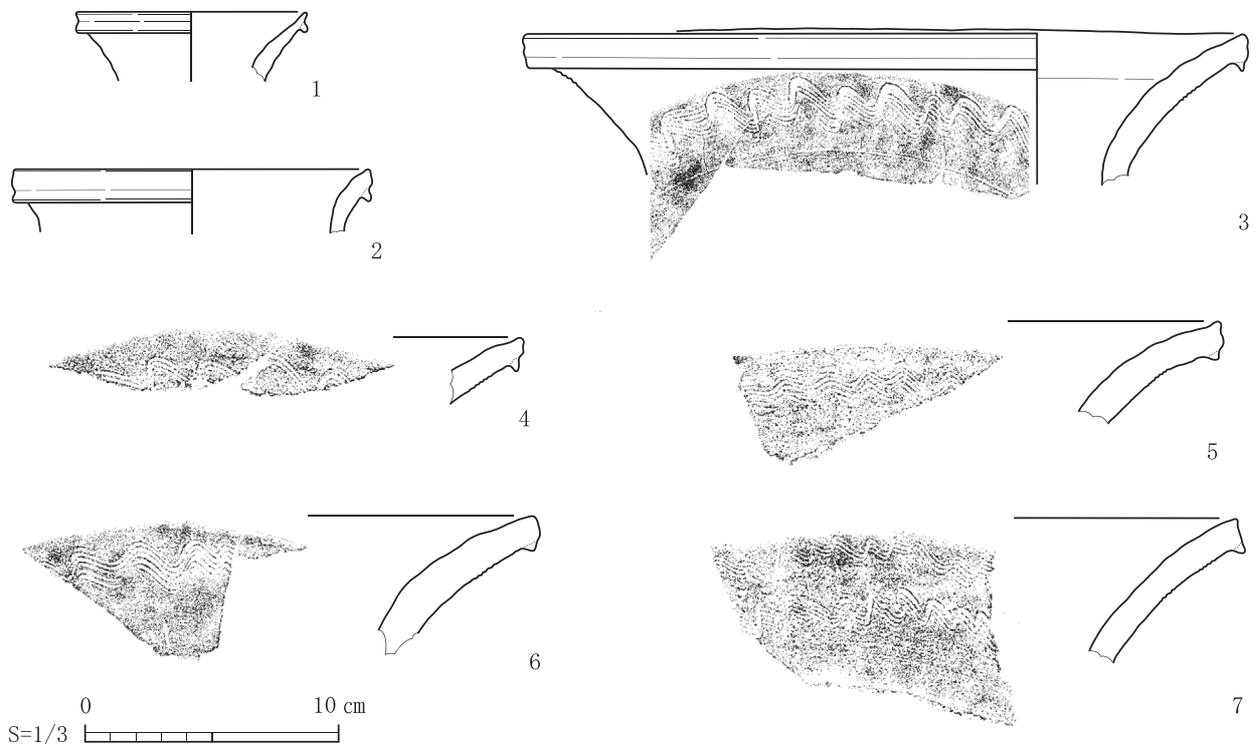


単位：cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・杯	3次床面	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ	(12.8) 1/24	-	4.4	9-4	R 22	焼成部東側出土
2	須恵器・杯	3次床面	ロクロナデ 底部：回転 ヘラ切り→一部ヘラケズリ	ロクロナデ	-	-	-	9-5	R 23	焼成部東側出土
3	須恵器・杯	3次床面	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8) 1/24	-	-	-	R 25	焼成部東側出土
4	須恵器・杯	3次床面	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.0) 1/24	-	-	-	R 26	焼成部中央出土
5	須恵器・蓋	3次床面	ロクロナデ 天井部：ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.0) 5/24	-	2.5	9-6	R 28	焼成部西側出土
6	須恵器・蓋	3次床面	ロクロナデ 天井部：ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.4) 10/24	-	2.6	9-7	R 27	焼成部東側出土
7	須恵器・盤	12層	ロクロナデ 体部：一部ヘラケズリ	ロクロナデ	(25.6) 4/24	-	-	9-8	R 31	焼成部東側出土

第20図 S R 1678窯跡出土遺物 1

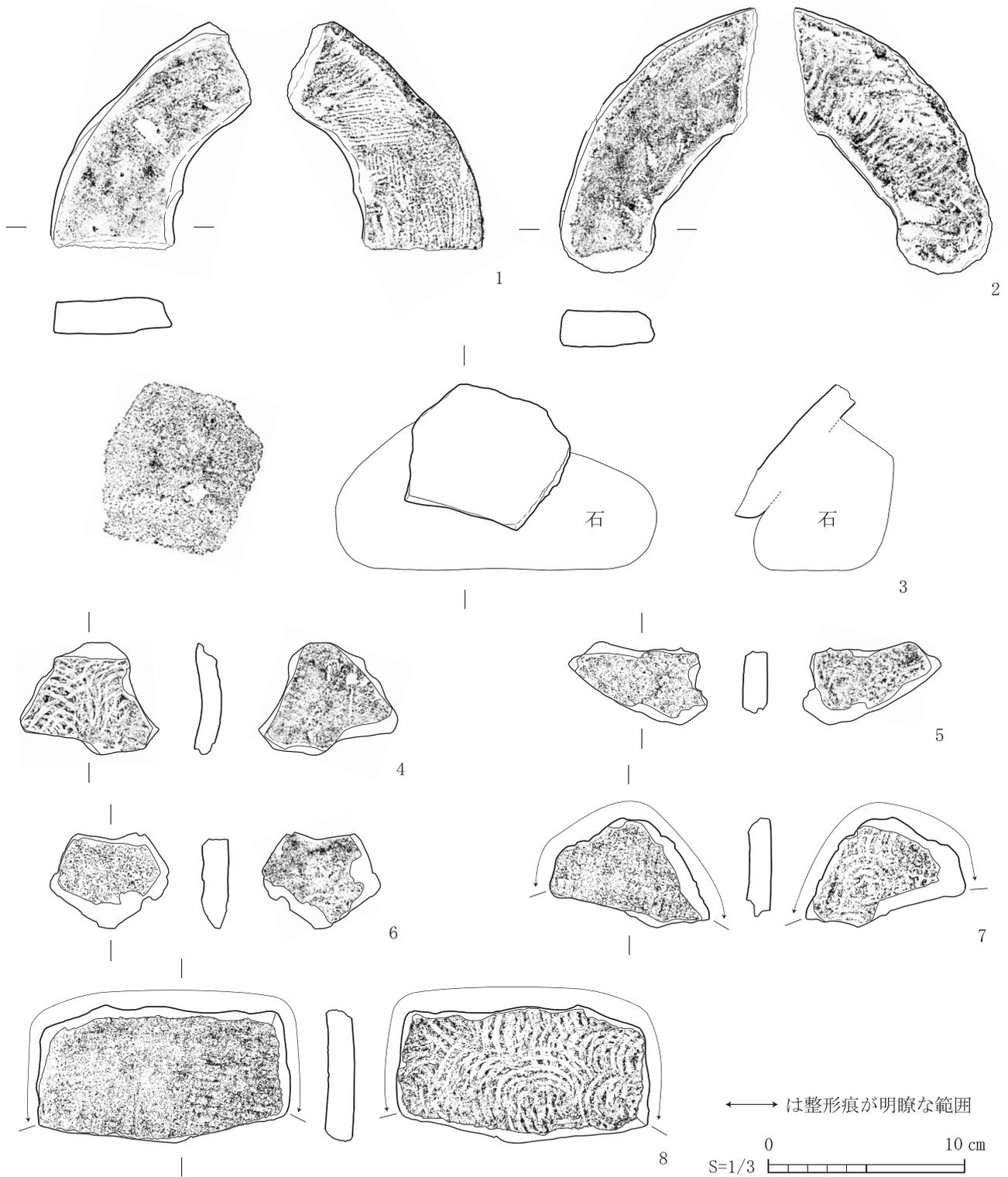
状である。断面は台形状を呈する。側面は、外側がヘラケズリされているのに対し、内側は丸くおさまられている。いずれも両端に破損の痕がみられ、片側では破損後にさらに火熱を受けた痕跡が確認できる。また、1には上下両面にハケメ状の工具痕が、2には下面に同心円状のあて具による叩き痕が認められる。次に、須恵器を転用した焼台についてみると、甕の口縁部から頸部の破片が1点みられるほかは、すべて甕及び横瓶の焼成後の体部破片を用いている。焼成部内全域から出土しているが、西側でやや多い。これらの多くには、破損後に側面を整形している痕跡が確認できる。また、製品あるいは別の焼台を重ねたと推測される痕跡が残るものもあるが、その特定までには至らない。なお、第22図3は焼台の石に須恵器片が熔着したものである。石の平坦面は直接火熱を受けていないことから、この面を下にして窯内に置かれたと推測される。この石の傾斜面に貼り付いている須恵器片の状況から、石と須恵器片の焼台としての用い方の一例がうかがえる。



単位：cm

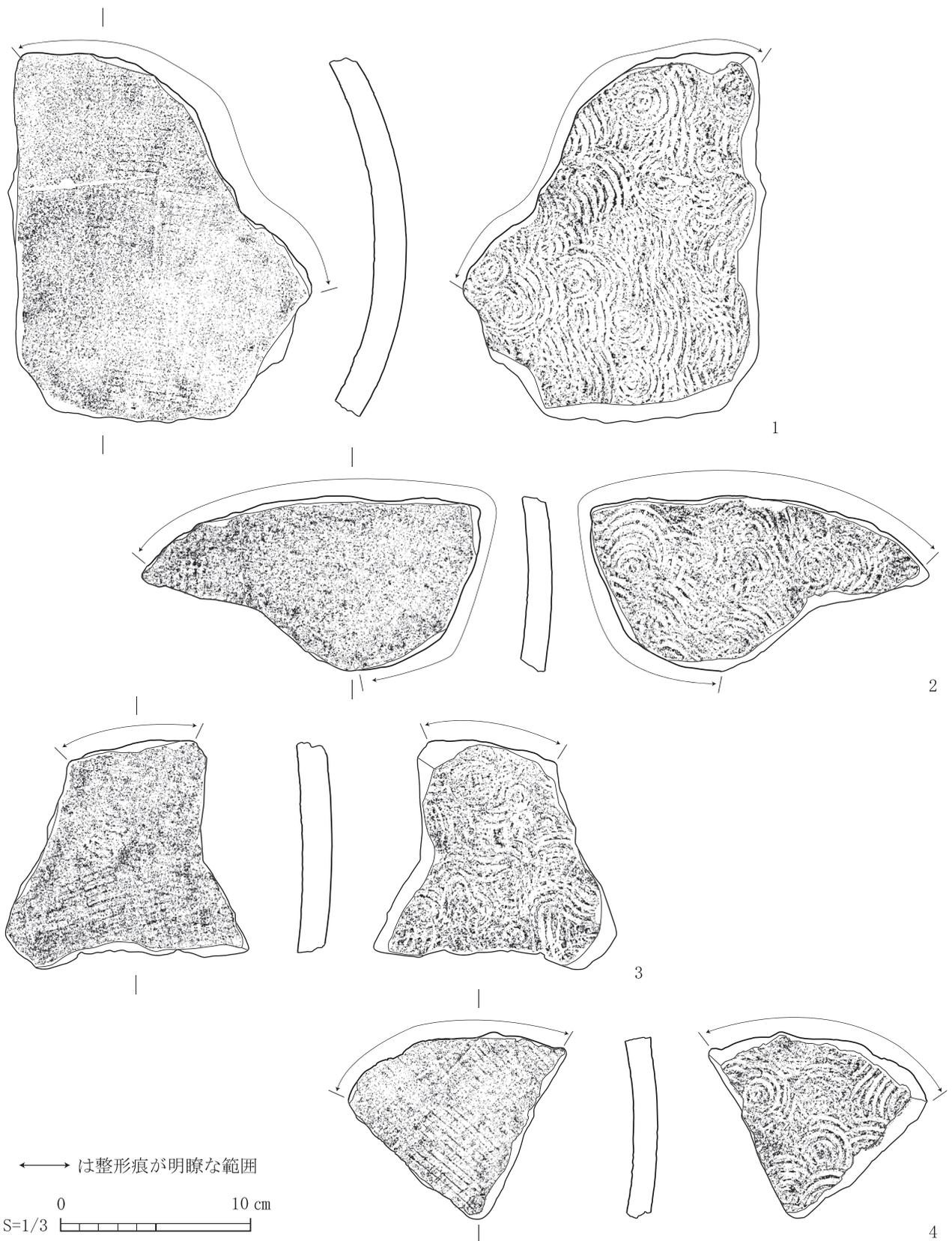
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・瓶	3次床面	ロクロナデ	ロクロナデ	(9.1) 6/24	—	—	9-9	R 29	焼成部中央出土
2	須恵器・横瓶	3次床面	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.1) 6/24	—	—	9-9	R 30	焼成部中央出土
3	須恵器・甕	3次床面	ロクロナデ 口縁部：櫛描波状文1段	ロクロナデ	(28.6) 1/24	—	—	10-1	R 32	焼成部東側出土
4	須恵器・甕	3次床面	ロクロナデ 口縁部：櫛描波状文1段	ロクロナデ	推定 28.2	—	—	10-2	R 33	焼成部西側出土
5	須恵器・甕	3次床面	ロクロナデ 口縁部：櫛描波状文1段	ロクロナデ	推定 29.8	—	—	10-2	R 35	焼成部東側出土
6	須恵器・甕	12層	ロクロナデ 口縁部：櫛描波状文1段	ロクロナデ	推定 29.0	—	—	10-2	R 36	焼成部東側出土
7	須恵器・甕	12層	ロクロナデ 口縁部：櫛描波状文2段	ロクロナデ	推定 29.8	—	—	10-2	R 34	焼台に転用 焼成部東側出土

第21図 S R 1678窯跡出土遺物 2



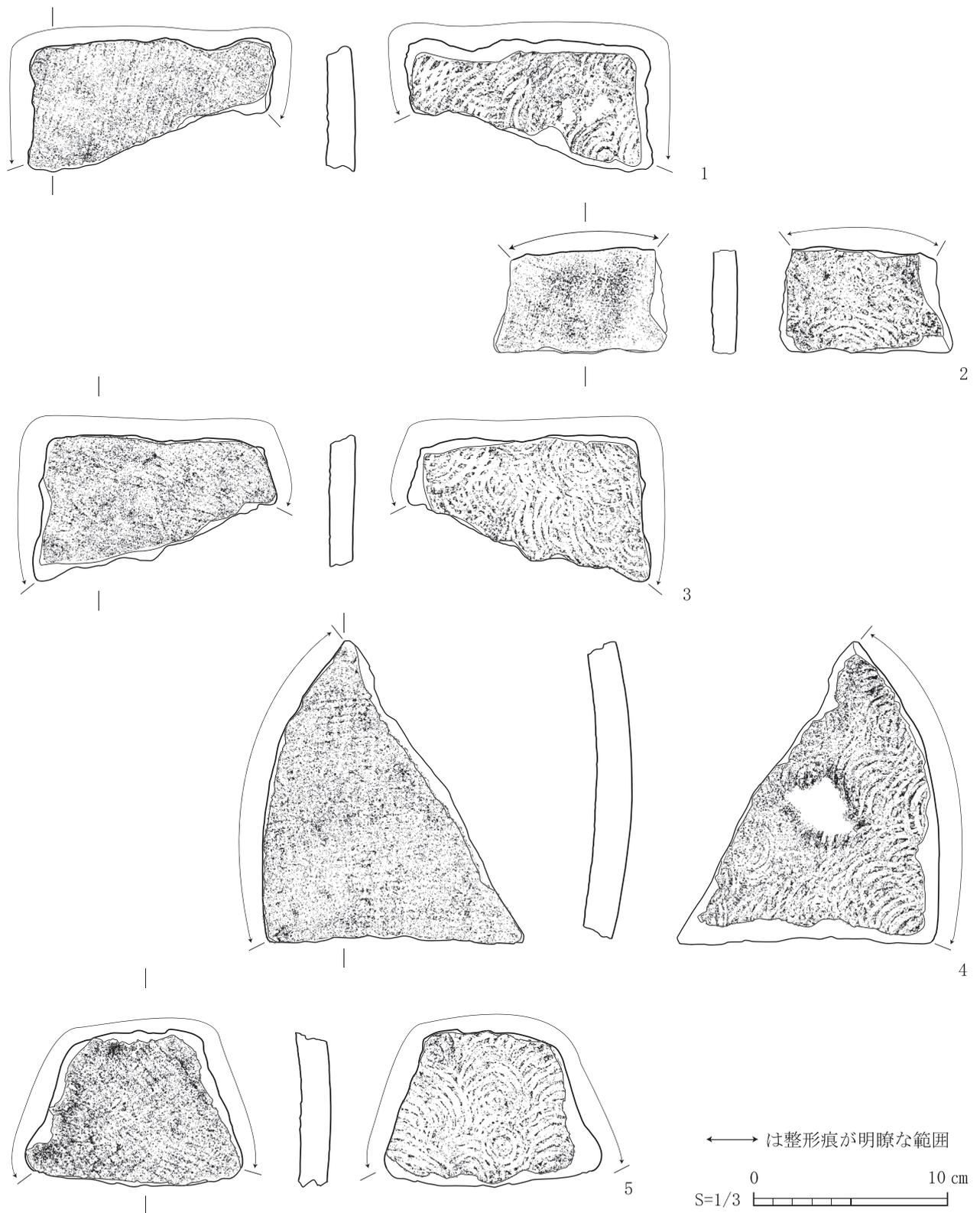
番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	—	12層	板状	10-4	R 37	5	—	20層	粘土盤状	10-5	R 44
2	—	3次床面	板状	10-4	R 38	6	—	20層	粘土盤状	10-5	R 45
3	須恵器・甕	12層	石に付着	10-3	R 39	7	須恵器・甕	2次床面		10-5	R 42
4	—	20層	粘土盤状	10-5	R 43	8	須恵器・甕	2次床面		10-5	R 58

第22図 S R 1678窯跡出土遺物 3 (焼台)



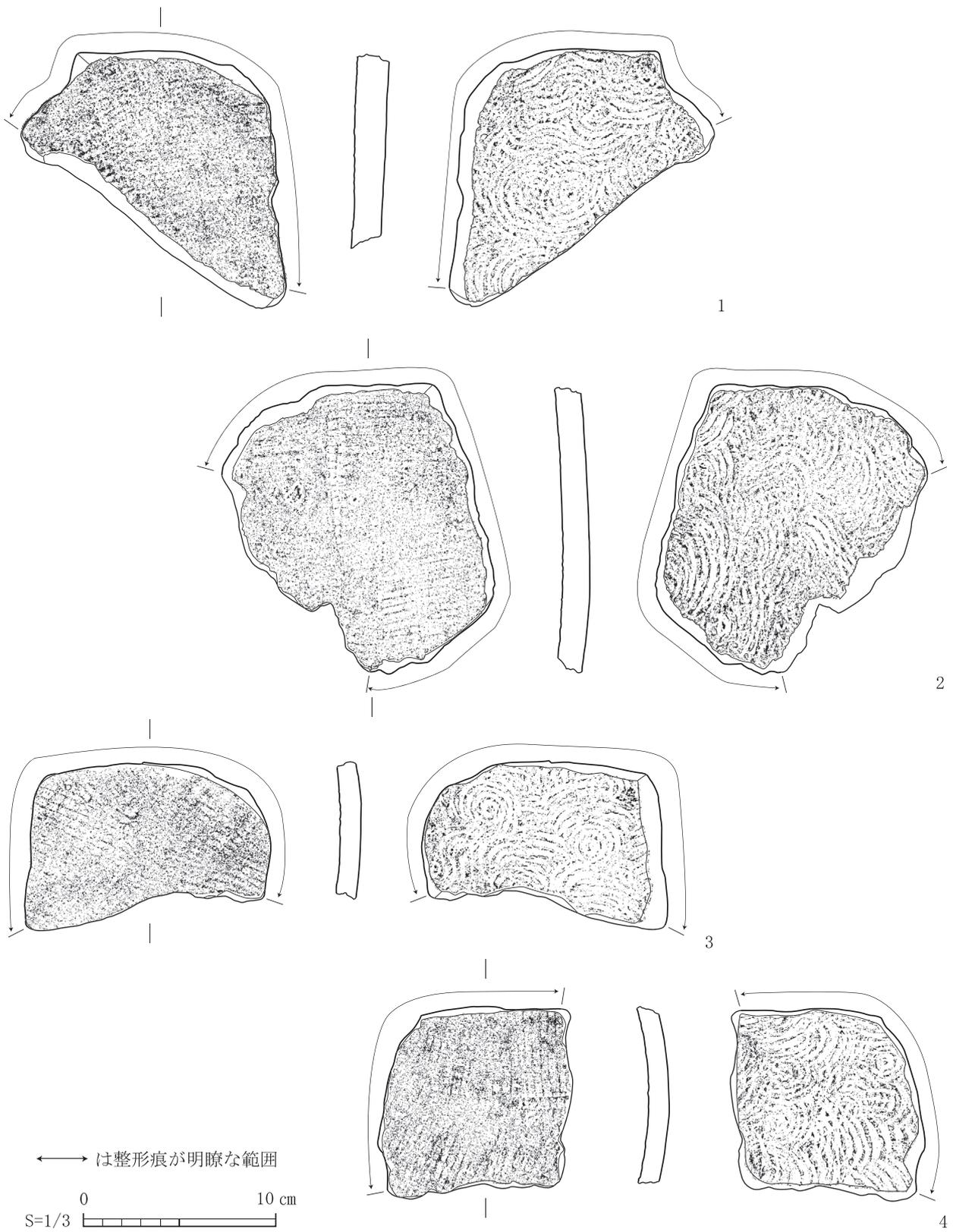
番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	須恵器・横瓶	2次床面	焼けひずみ	10-6	R 40	3	須恵器・甕	18層	内外面に付着物	10-6	R 46
2	須恵器・甕	18層		10-6	R 47	4	須恵器・甕	3次床面		10-6	R 56

第23図 S R 1678窯跡出土遺物 4 (焼台)



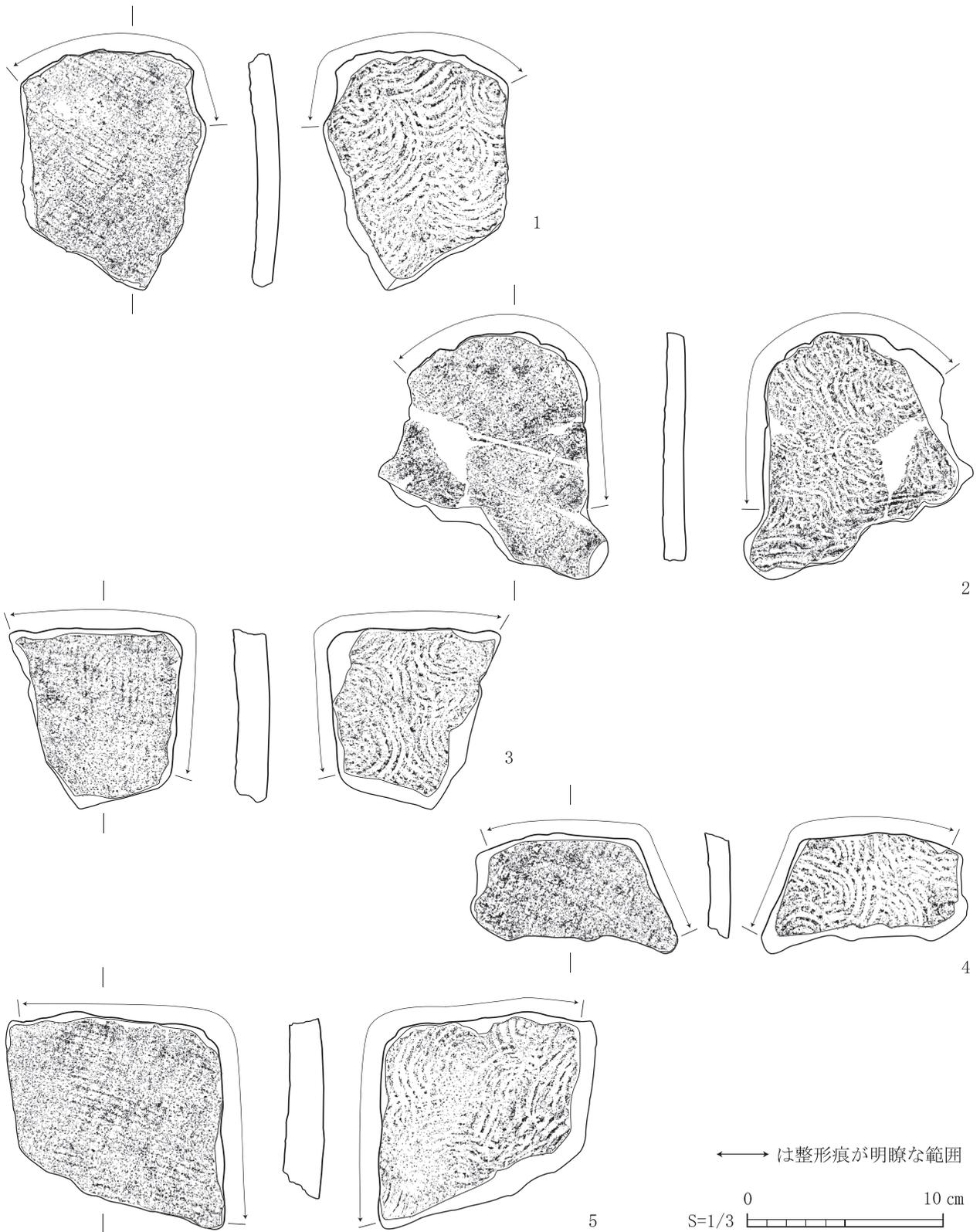
番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	須恵器・甕	3次床面	内面に重ね痕	10-7	R 52	4	須恵器・甕	3次床面	内面に重ね痕	10-7	R 54
2	須恵器・横瓶	3次床面	内面に重ね痕	10-7	R 72	5	須恵器・甕	3次床面		10-7	R 64
3	須恵器・甕	3次床面		10-7	R 53						

第24図 S R 1678窯跡出土遺物 5 (焼台)



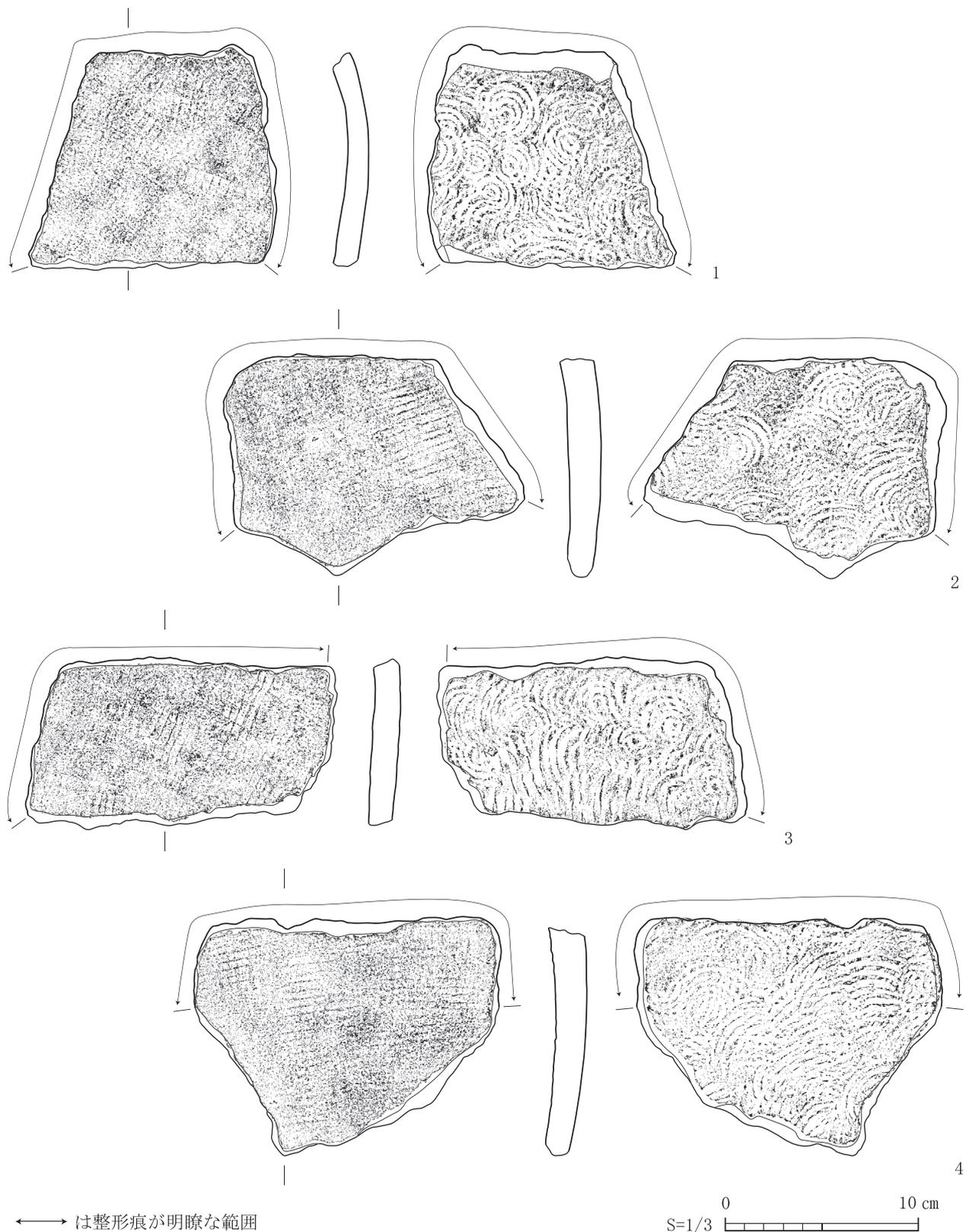
番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	須恵器・横瓶	3次床面		10-8	R 57	3	須恵器・横瓶	3次床面		10-8	R 65
2	須恵器・甕	3次床面	内面に重ね痕	10-8	R 59	4	須恵器・横瓶	3次床面	焼けひずみ	10-8	R 66

第25図 S R 1678窯跡出土遺物 6 (焼台)



番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	須恵器・甕	3次床面	外面に重ね痕	10-9	R 61	4	須恵器・甕	3次床面		10-9	R 70
2	須恵器・横瓶	3次床面	内外面に重ね痕	10-9	R 69	5	須恵器・甕	3次床面	内面に重ね痕	10-9	R 68
3	須恵器・甕	3次床面	内面に重ね痕	10-9	R 71						

第26図 S R 1678窯跡出土遺物 7 (焼台)



番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号	番号	転用材	層位	特徴	写真 図版	登録 番号
1	須恵器・横瓶	10層	内面に重ね痕	10-10	R 73	3	須恵器・甕	12層		10-10	R 75
2	須恵器・甕	10層	焼けひずみ	10-10	R 74	4	須恵器・甕	12層		10-10	R 77

第27図 S R 1678窯跡出土遺物 8 (焼台)

## IV. ま と め

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壇、土器埋設遺構、窯跡である。以下、年代を中心にした遺構ごとの概要をまとめることにする。

### 1. 竪穴住居跡

検出した5軒は、すべて丘陵平坦部の縁辺を巡るように立地しているが、直接の重複関係から最低3度の変遷が推定される。全体的にみると、一辺が3～5mと比較的小規模なもので、北壁にカマドが付設し、外延溝が取り付くものが多い。このうち、S I 1662住居跡はS I 1661住居跡とS I 1663住居跡と重複し、前者より新しく、後者より古いものである。また、1度の建て替えが認められるが、古い時期（A期）からは遺物はほとんど出土していない。新しい時期（B期）からは比較的多くの遺物が出土しているが、大部分は小破片であり、さらに住居廃絶後の混入と考えられる遺物の出土がかなりの数にのぼる。唯一、カマド床面に敷き詰められた状況で出土した土師器杯・甕の一括資料がある。これらはB期のカマド構築の際に用いられたものと考えられる。このうち、杯（第6図4）は非ロクロ調整で、やや平坦な丸底を呈し、体部は内湾気味に立ち上がるものである。外面には口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部でヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキの後、黒色処理されているものである。外面では、体部と底部の境に段を有するが、この段は比較的下方に位置し、内面ではこれに対応する段もしくは稜はみられない。このような特徴をもつ杯は、多賀城市山王遺跡八幡地区S D 180 B溝跡において、天平12年（740年）から天平勝宝元年（749年）までのものと判断できる漆紙文書と同一層から出土している（註1）。一方、甕のうち全体の形態がわかるもの（第6図3）は、非ロクロ調整の長胴形のもので、体部の最大径が上半部にある。口縁部の内・外面にヨコナデ、体部外面にハケメが施されている。類似のものは、山王遺跡八幡地区S D 677溝跡から多く出土しており、8世紀中葉頃に位置付けられている（註2）。このほか、利府町郷楽遺跡第107号住居跡では、杯と甕の双方に類似したものがあり、これも8世紀中葉頃に位置付けられている（註3）。これらのことから、S I 1662住居跡の年代は8世紀中葉と考えられる。これに切られるS I 1661住居跡については、出土遺物がなく8世紀中葉以前としか判断できない。ただ、埋土が人為的に埋められていることや、S I 1662住居跡とほぼ同じ位置で重複していることから、8世紀中葉を大きく遡ることはないと推定される。つぎに、S I 1662住居跡を切っているS I 1663住居跡についてみると、床面上出土の土師器はすべて非ロクロ調整のものである。しかし、全体の形態がわからないため、ここから年代を特定するには至らない。須恵器杯は、床面上、周溝内、支柱穴の抜き取り穴から、いずれもロクロからの切り離し後、再調整されたものが出土している。特に支柱穴の抜き取り穴出土のものは、回転糸切り後、底部周縁をわずかに手持ちヘラケズリしたものである。回転糸切りの杯は、主に8世紀中葉頃からみられるが、本住居跡出土のものは再調整がかなり簡略化しており、時期的にやや下るものと考えられる。また、2層出土のものであるが底部に木葉痕が残るロクロ調整の土師器杯（第8図1）が出土しており、ロクロ調整の土師器が普及し始めた8世紀後葉頃のものとして推定される。これらのことから、S I 1663住居跡は大きくとらえて8世紀後半のものとして位置付けられる。この北側に位置するS I 1664住居跡は、他の遺構との重複関係をもたないものである。遺物はすべて破片で、床面上出土の土師器が非ロクロ調整である以外は、年代の手がかりとなるものは出土していない。しかし、方向や構造等がS I 1662・1663住居跡と共通する点が多いことから、おおむね8世紀中葉から後葉のものとしてみておきたい。つづいて、これらと離れた調査

区北西部に位置するS I 1665住居跡についてみると、方向、形態、カマドの位置等、他の住居跡と異なる様相をみせる。床面近くから出土した土師器甕（第11図2）は、非ロクロ調整の小型のもので、口縁部は短めで、さほど外傾しない。口縁部の内・外面にヨコナデ、体部外面にハケメが施されている。これについては、山王遺跡八幡地区SD180B溝跡の8世紀中葉の土層から類似のものが出土している（註4）。また、周溝内からは非ロクロ調整の土師器杯の小破片で、全体的に内湾し体部と底部の境に段を有するものが出土している。次に、床面上出土の土師器杯（第11図1）は、非ロクロ調整の深めのもので、丸底を呈し、体部は直線的に立ち上がりそのまま口縁部に至る。外面は口縁部でヨコナデ、底部でヘラケズリが施されており、内面はヘラミガキの後、黒色処理されているものである。ただ、このような特徴をもつものの類例は見当たらなかった。8世紀代とみた場合、完全な丸底を呈するなど古い時期の特徴がみられる。以上のことから、S I 1665住居跡の年代は、大きく8世紀前葉から中葉のものともておきたい。

## 2. 掘立柱建物跡

調査区南西部の平坦部を中心に、2間×3間のものが2棟、2間×2間のものが1棟検出されている。このうち、東側に位置するS B 1666建物跡は、S I 1663住居跡と重複し、これより新しい。さらに、灰白色火山灰（註5）を含む住居埋土を掘り込んでいることから、10世紀前葉以降のものであることがわかる。遺物も柱穴埋土から須恵系土器杯が出土しており、このことの裏付けとなっている。他の2棟（S B 1667・S B 1668建物跡）については、年代を特定できるような遺物は出土していない。しかし、両者とも建物全体の方向や規模、柱穴の形態、さらにすべての柱穴で柱の抜き取りが確認できるなど、S B 1666建物跡との共通点が多い。よって、これと同時期もしくは近い時期のものと推定される。このことから、S B 1667・1668建物跡については、10世紀前葉を中心とした時期が考えられる。

## 3. 溝跡、土壇

溝跡については、調査区南西部で2条、北西部で1条が検出されている。いずれも一部の検出であり、出土遺物も少ないため性格等は把握できない。南西部検出のSD1669溝跡とSD1670溝跡は重複関係にあるが、平面及び断面の状況、埋土等に共通点が多く、近い時期のものと考えられる。遺物は、前者からロクロ調整の土師器が若干出土している。また、いずれの埋土も各遺構を覆うII層に近似している。これらことから、平安時代以降のものと推定される。北西部検出のSD1671溝跡についても、詳細は不明である。出土遺物に青磁の小片があることから、中世以降のものと推定される。

土壇についてみると、調査区西側の平坦部で検出されたS K 1672～1674土壇の3基は、形態や規模及び埋土に炭化物や焼土を多く含む点など共通点が多い。よって、同時期もしくは近い時期のものと推定される。いずれも、出土遺物が少なく性格等の詳細は不明であるが、S K 1672土壇から須恵系土器杯が出土していることから、10世紀前葉以降のものと推定される。調査区北西部で検出されたS K 1676・1677土壇は、いずれも埋土上層及び上面に灰白色火山灰が認められる。遺物が、後者から出土した須恵器甕の小破片1点のみのため性格等は不明であるが、埋土の状況をみると前者は自然堆積、後者は人為的な埋め戻しである。年代は、火山灰の降下年代から10世紀前葉以前と考えられる。

## 4. 土器埋設遺構

調査区西側の平坦部において2基検出されている。南側に位置するS X 1679は、2個体の土師器甕の口縁部を合わせて、横位に埋設している。一方、北側に位置するS X 1680は、土師器甕を単体で正位に埋設したものである。土器埋設遺構については、本遺跡を含む多賀城跡周辺で多く発見されており、その集成

も行われている（註6）。その中では検出状況や内容から4つの分類を想定しているが、本遺跡のものは「集落のはずれなどで単独もしくは散在的に発見され、他の遺構との関連性が特に見出せない例」に該当すると考えられる。年代については、S X1679がS B1667建物跡の柱抜き穴を切っていることから、10世紀代のものと推定される。S X1680は、埋設された土師器甕の内面にロクロ回転によるハケメが施されており、近年の市川橋遺跡（註7）等多賀城跡周辺遺跡の発掘調査における同様の土師器の出土状況から、8世紀末から9世紀代のものと推定される。

## 5. 窯 跡

須恵器を焼成した地下式窖窯である。調査区内ではこの1基のみの検出であり、さらに周辺部においても、これまで窯跡の存在をうかがわせるような事例は確認されていない。燃焼部の一部と前庭部を失っているが、残存長約9.5m、最大幅約2mの比較的規模の大きなものである。以下、構造と出土遺物から年代的な位置付けを行いたい。

構造については、本窯跡の煙道部の形態に着目したい。本窯跡のものは、断面でみると奥壁が約77度の角度で立ち上がる。そのため平面でみると焼成部に比べ著しく幅が狭まることもあり、突起状に張り出す形態を呈する。ここで宮城県内で発掘調査された地下式窖窯をみると、多賀城創建期の窯跡群である大崎市下伊場野窯跡群（註8）、同木戸窯跡群（註9）、色麻町日の出山窯跡群（註10）においては、奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、平面でみると煙出し穴が窯体内におさまる形態である。このことは、8世紀初頭及び前半に位置付けられている涌谷町長根窯跡A地点3号窯跡（註11）と大和町鳥屋三角田南窯跡（註12）、さらに7世紀第2四半期から中葉を中心とした時期の仙台市土手内窯跡（註13）においても同様のことがいえる。近隣の例をみると、福島県相馬市善光寺遺跡（註14）においては、調査された8基のうち一番古い時期に位置付けされる1号窯跡を除くと、宮城県内のものと同様の形態を呈する。1号窯跡については、煙道部は崩落により摺鉢状ピットになっているが、このピットに接する部分では窯の幅もかなり狭くなっており、煙道は窯尻より外に張り出して付くものと考えられ、平面では本窯跡と類似したあり方を示す。善光寺1号窯跡の年代は、考察においては出土遺物から7世紀前半でも古い段階に位置付けられている。善光寺遺跡では、1号窯跡出土の須恵器の特徴から、その類例を関東地方の窯跡にも求めていることより、次に関東地方の例をみてみたい。関東地方の須恵器窯においては、排煙構造の形態の違いによっていくつかの形式に分類されている。本窯跡の形態は、このうち「半直立煙道窯」の範疇でとらえられると考えられる。「半直立煙道窯」は、煙道奥壁がほぼ垂直に立ち上がる「直立煙道窯」に先行するもので、旧国別でみると調査例の多い上野と武蔵では、6世紀後半から7世紀前半にかけて広く採用されるという（註15）。

次に出土遺物についてみると、本窯跡出土のものは特に杯、蓋、盤において、全体的に厚手で、稚拙さが目立つという特徴がある。ここで、前述した善光寺遺跡の出土遺物をみると、善光寺1型式とした1号窯跡出土須恵器のうち、杯は蓋の受部を有する杯Aと、それを持たない杯Bに分けられ、後者が主体を占める。杯Bは「底部は回転ヘラ切り痕を残すが、その上に若干の粗いケズリかナデを加えたものもあり、丸底で体部との境が明確でない平底風を呈する。直径は12.3~17.1cmにバラついており、13~14cm付近にやや集中が見られる。」ものであり、また「底部から内湾気味に立ち上がって口縁部となる。器壁は比較的厚くて全体的な作りは粗雑である。」というものである。これを本窯跡出土の杯（第20図1~3）と比べた場合、口縁部の形態が異なるなど細部で違いは認められるが、全体的には共通した特徴をもつといえる。次に蓋について比べると、全体的に厚手で、天井部に粗いヘラケズリが加えられている点などで共通する。

しかし、本窯跡出土（第20図5・6）の方が、やや小型で全体的に扁平であり、口縁端部が厚みをもったまま受け口状を呈しておさまるなどの特徴に違いがみられる。さらに稚拙さもより顕著である。甕については、本窯跡出土のものには、善光寺1型式にみられるような口縁部の上端面にまで波状文を施すような過飾的な装飾はみられない。ここで、善光寺1型式の年代についてみると、受部を有する杯Aと細長い長方形の透し孔を二段二方に設けた高杯Aの存在から、畿内の陶邑窯跡群における田辺編年Ⅱ期後半（TK209型式）に対比させて、7世紀前半でも古い段階としている。本窯跡出土のものに類似する杯Bのほか過飾的な甕等については、杯Aと高杯Aの特徴にみられるような陶邑窯跡の要素から大きく離れた、在地的な様相を強くもった須恵器と位置付けている。これに関連して、関東地方における7世紀前半を中心にする窯跡の例をみると、厚手で稚拙なつくりのものが、特に杯、蓋にみられる茨城県幡山2号窯跡（註16）。急激に在地化が進み、陶邑窯跡の系譜から顕著な逸脱が認められる群馬県太田金山窯跡群等の上野の諸窯跡（註17）。畿内及び東海地方の影響を受けた須恵器と在地的な様相をもった須恵器が共伴する埼玉県根平1号窯跡（註18）や神奈川県熊ヶ谷東窯跡第3段階（註19）。さらに、新たな窯構造である「溝付き煙道窯」の導入と熟練した製作技法がみられる埼玉県羽尾窯跡（註20）等のような例があり、様々な様相がみられる。以上のことから、本窯跡については東北地方南部や関東地方にみられるように、大小の差はあるにせよ地域色が前面に現われることによって端的に示される、在地化の流れの延長線上に位置するものと理解される。さらに、出土する須恵器は陶邑窯跡の系譜からは、大きく離れた特徴を持つものと捉えることができる。

以上のことをふまえて、本窯跡の年代をみたとき、構造及び出土遺物の特徴の双方とも善光寺遺跡1号窯跡に、より多くの類似点を見いだせる。したがって、7世紀前半でも古い段階という年代が一つの目安になると推定される。また、本窯跡の煙道奥壁の構造が、7世紀第2四半期から中葉を中心とした時期に位置付けられる仙台市土手内窯跡の構造に先行することが、関東地方の例で確認されていることも、この頃に年代を求める一つの裏付けになると考えられる。しかし、善光寺遺跡1号窯跡出土の杯Aと高杯Aのような、陶邑窯跡の編年に対比できる器種が本窯跡の出土遺物にはみられないこと。また、本窯跡からの出土量が僅少であり、全体の特徴がわかるものがごくわずかであることなど流動的な要素が多いことから、本窯跡の年代については、大きく捉えて7世紀前半とみておきたい。

このほか、本窯跡の出土遺物には、杯においては均一な厚みをもつもの（第20図4）や、甕、瓶にみられる口縁端部のつくりが比較的鋭角的なもの（第21図1～4）があり、他の稚拙さが顕著なものとの違いが認められる。これについては、つくり手の違い等を想起させるが、ほとんどが破片であり、全体の形態がわかるものがないため詳細は不明である。

次に供給先については、周辺遺跡から確実な類例は見いだせなかった。わずかに、本窯跡の北西側約4.8 kmに位置する利府町菅谷横穴墓群出土の横瓶に、本窯跡出土のものとの部分的な類似点が認められた。菅谷横穴墓群は、県内有数の規模をもつ横穴墓群として知られ、これまで39基の横穴墓が調査されている。出土遺物の年代から、その上限は7世紀初頭に位置付けられている（註21）。このうち、B区2号墳出土の横瓶について、口縁先端部の直下に隆带状に細い粘土紐を貼り付けていると推定される箇所を確認できる。これは本窯跡の瓶及び甕に共通した技法である。さらに、口縁部全体は丸味を持ち、先端部がわずかにつまみ上げられるなど、本窯跡の横瓶（第21図2）と類似したものがある。また、口縁部及び体部に櫛描き波状文等の装飾が施されていないことも共通している。本窯跡のものが破片であり、さらに1点だけ

の類似のため断定までには至らないが、本窯跡が菅谷横穴墓群の副葬品生産地の一つであった可能性はあると考えられる。なお、本遺跡と近接する山王遺跡と市川橋遺跡からは、7世紀前半を中心とする在地生産品と考えられる須恵器が多く出土しており、その特徴から群馬県を中心とする北関東からの影響が指摘されている（註22）。本窯跡出土の須恵器とは、特に蓋において部分的に共通した特徴をもつが、全体的な形態や胎土は明らかに異なる。また、本窯跡出土の方が稚拙さがより顕著であるといえる。

（註）

- （註1） 多賀城市教育委員会 『山王遺跡－第10次調査概報－』 多賀城市文化財調査報告書第27集 1991  
 多賀城市教育委員会 『山王遺跡－第12次調査概報－』 多賀城市文化財調査報告書第30集 1992
- （註2） 宮城県教育委員会 『山王遺跡Ⅴ』 宮城県文化財調査報告書第174集 1997
- （註3） 宮城県教育委員会・利府町教育委員会 『利府町郷楽遺跡Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集 1990
- （註4） （註1）と同じ
- （註5） 「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に消失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』：1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条に見える「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある（町田洋『火山灰とテフラ』『日本第四紀地図』：1987、阿子島功・壇原徹『東北地方、100頃の降下火山灰について』『中川久夫教授退官記念地質学論文集』：1991）。本書では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従った。
- （註6） 多賀城市教育委員会 『高崎遺跡ほか』 多賀城市文化財調査報告書第82集 2006
- （註7） 多賀城市教育委員会 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』 多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- （註8） 宮城県多賀城跡調査研究所 『下伊場野窯跡群』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第19冊 1994
- （註9） 宮城県多賀城跡調査研究所 『木戸窯跡群Ⅰ』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第30冊 2005  
 宮城県多賀城跡調査研究所 『木戸窯跡群Ⅱ』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第31冊 2006
- （註10） 宮城県教育委員会 『日の出山窯跡群』 宮城県文化財調査報告書第22集 1970  
 色麻町教育委員会 『日の出山窯跡群』 色麻町文化財調査報告書第1集 1993
- （註11） 涌谷町教育委員会 『長根窯跡群Ⅲ』 1976
- （註12） 東北学院大学考古学研究所 『鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告』 温故第9号 1973
- （註13） 仙台市教育委員会 『土手内－土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴B地点発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第165号 1992
- （註14） 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター 『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ－善光寺遺跡－』 福島県文化財調査報告書第192集 1988
- （註15） 渡辺一 『古代東国の窯業生産の研究』 青木書店 2006
- （註16） 常陸太田市教育委員会 『幡山遺跡発掘調査報告』 1977
- （註17） （註15）と同じ
- （註18） 埼玉県教育委員会 「根平」『日本住宅公団高坂丘陵地区 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 1980
- （註19） 奈良地区遺跡調査団 『神奈川県横浜市緑区奈良町 奈良地区遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－熊ヶ谷東遺跡－』 1986
- （註20） 滑川村教育委員会 『埼玉県比企郡滑川村羽尾窯跡発掘調査報告書』 1980
- （註21） 利府町教育委員会 『菅谷道安寺横穴群』 利府町文化財調査報告書第2集 1978
- （註22） 村田晃一 『7世紀集落研究の視点(1)』 宮城考古学第4号 2002

（参考文献）

- 多賀城市 『自然－地質－』 多賀城市史第1巻－原始・古代・中世－ 1997
- 吾妻俊典 『多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代』 宮城考古学第6号 2004
- 田辺正三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966
- 中村 浩 『泉北丘陵に広がる須恵器窯－陶邑遺跡群－』 新泉社 2006
- 服部敬史 『東国における古墳時代須恵器生産の特質』 東国土器研究第4号 1994
- 鶴間正昭 『関東における古墳時代の須恵器』 東海土器研究会発表要旨 2000

調査区全景（東より）



調査区西半部全景  
（東より）

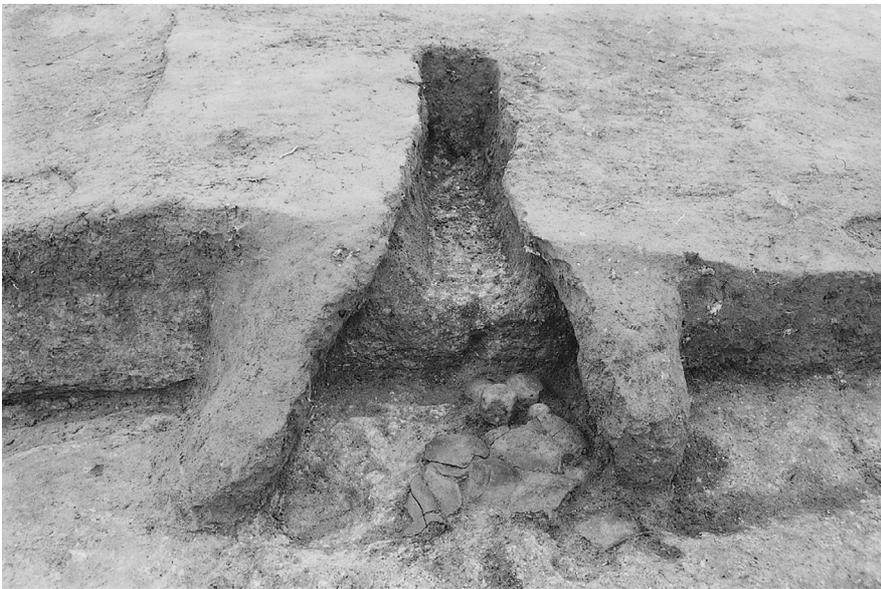


S I 1661・1662A住居跡  
（北より）





S I 1662B 住居跡（西より）



S I 1662B 住居跡カマド内  
遺物出土状況（南より）



S I 1663住居跡（西より）



S I 1664住居跡 (西より)



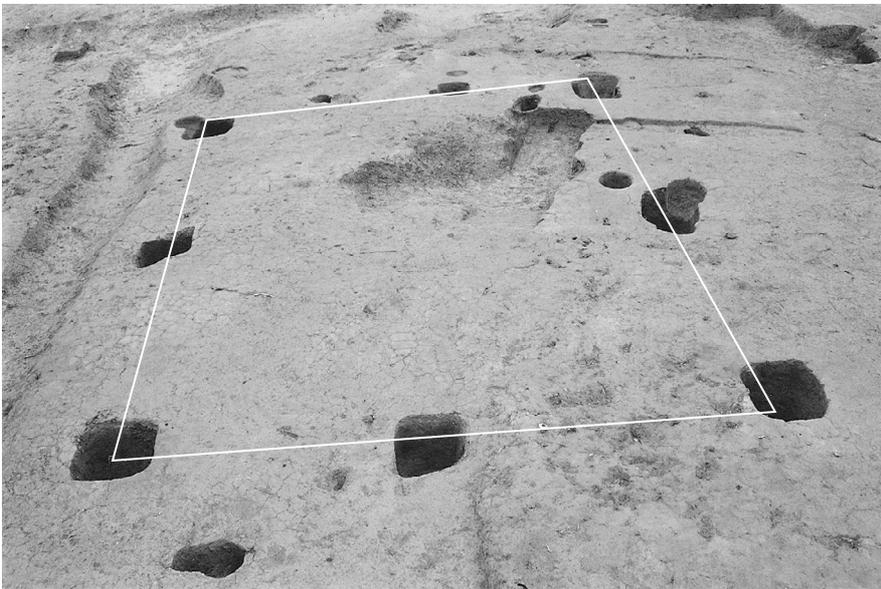
S I 1665住居跡 (南より)



S B 1666建物跡 (西より)



S B 1667 建物跡 (北より)



S B 1668 建物跡 (北より)



S X 1679 土器埋設遺構  
(北東より)



S X 1680 土器埋設遺構  
(南より)



S R 1678 窯跡検出状況  
(東より)



S R 1678 窯跡 3 次床面  
(東より)



S R 1678窯跡 2次床面  
(東より)



S R 1678窯跡北側壁  
(南東より)



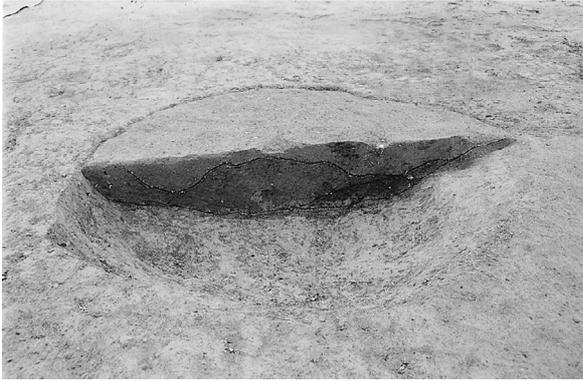
S R 1678窯跡南側壁  
(北東より)



S D 1671溝跡土層堆積状況 (南より)



S K 1672土壙土層堆積状況 (南西より)



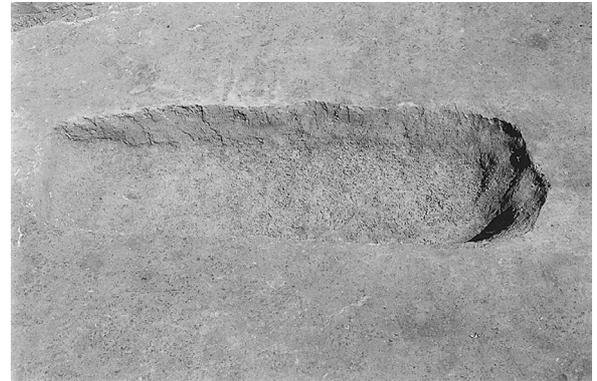
S K 1673土壙土層堆積状況 (西より)



S K 1674土壙完掘状況 (西より)



S K 1676土壙完掘状況 (南西より)



S K 1677土壙完掘状況 (南より)



竪穴住居跡調査風景 (南西より)



窯跡調査風景 (東より)



1 土師器 杯 (第8图2)



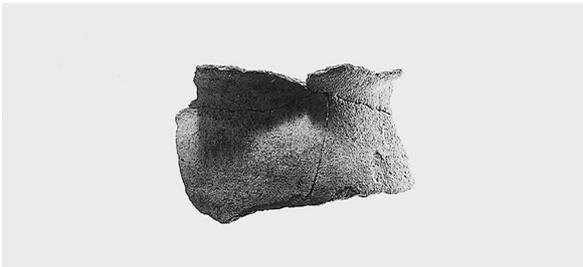
2 土師器 杯 (第8图1)



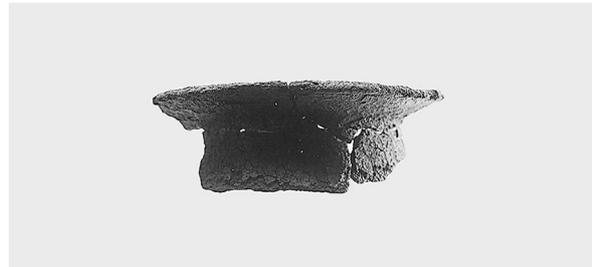
3 土師器 杯 (第6图4)



4 土師器 杯 (第11图1)



5 土師器 甕 (第6图1)



6 土師器 甕 (第6图2)



7 土師器 甕 (第6图5)



8 土師器 甕 (第11图2)



9 土師器 甕 (第6图3)



10 土師器 甕 (第8图6)



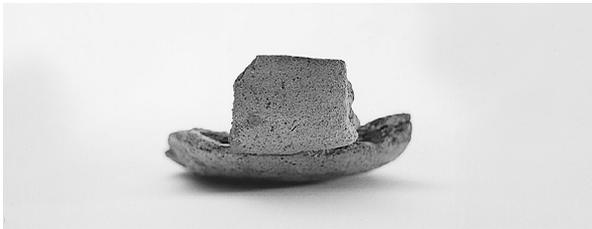
1 土師器 甕 (第17図1)



2 土師器 甕 (第17図2)



3 土師器 甕 (第18図1)



4 須恵器 杯 (第20図1)



5 須恵器 杯 (第20図2)



6 須恵器 蓋 (第20図5)



7 須恵器 蓋 (第20図6)



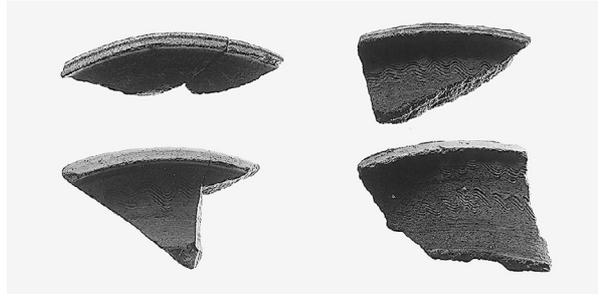
8 須恵器 盤 (第20図7)



9 須恵器 瓶 (第21図1・2)



1 須恵器 甕 (第21図3)



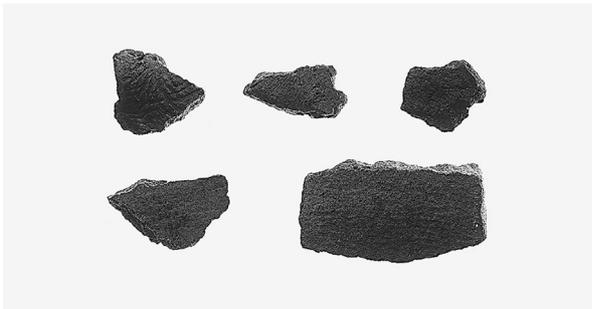
2 須恵器 甕 (第21図4~7)



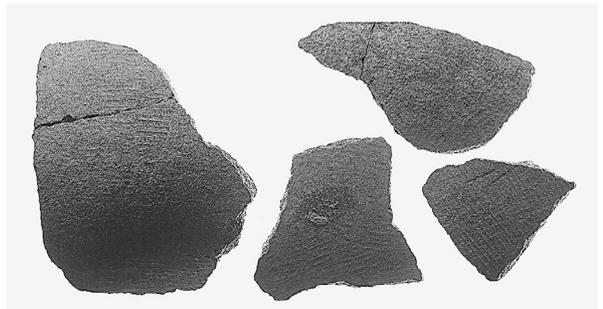
3 焼台 (第22図3)



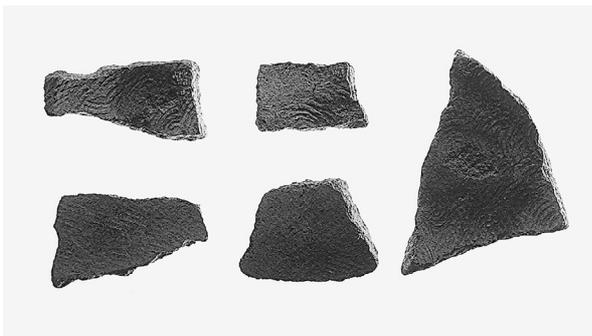
4 焼台 (第22図1・2)



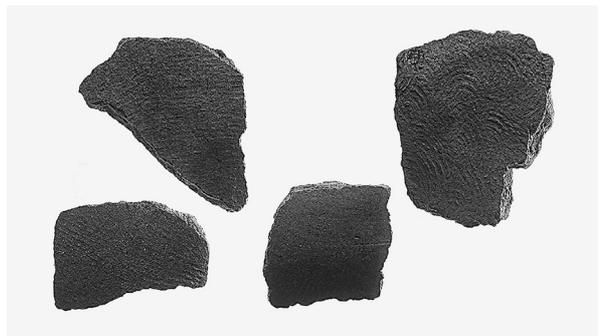
5 焼台 (第22図4~8)



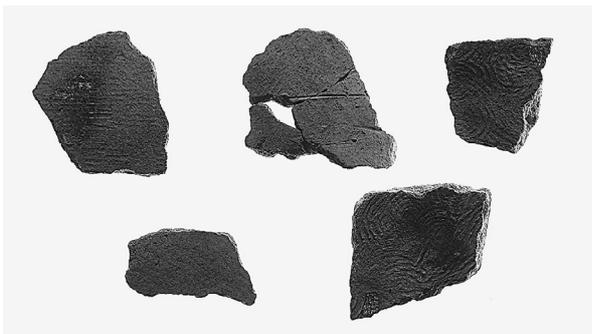
6 焼台 (第23図)



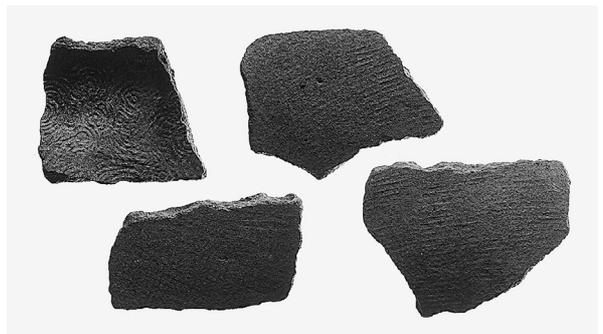
7 焼台 (第24図)



8 焼台 (第25図)



9 焼台 (第26図)



10 焼台 (第27図)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たかさきいせき							
書 名	高 崎 遺 跡							
副 書 名	第56次調査報告書							
シ リ ー ズ 名	多賀城市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第89集							
編 著 者 名	島田 敬 廣瀬 真理子							
編 集 機 関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134							
発 行 年 月 日	西暦2007年 3 月30日							
ふ り が な 所 収 遺 跡	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかさきいせき 高崎遺跡 第56次調査	た がじょうし 多賀城市 とめがや 留ヶ谷一丁目 35地内	042099	18018	38度 17分 55秒	141度 00分 20秒	20060410 ～ 20060811	1,520m <sup>2</sup>	宅地造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高崎遺跡 第56次調査	集落・都市・ 城館	古墳～近世	竪穴住居跡・掘立 柱建物跡・土器埋 設遺構・窯跡	土師器 須恵器		7世紀前半の窯跡、8世紀代 の住居跡、10世紀前葉を中心 とした建物跡を発見した。		

---

---

多賀城市文化財調査報告書第89集

## 高 崎 遺 跡

－第56次調査報告書－

平成19年3月30日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電 話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電 話 (022)368-1141

印刷 有限会社 工 陽 社  
宮城県塩竈市尾島町8番7号  
電 話 (022)365-1151

---